
外法少女と魔法少年

平成貴族

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外法少女と魔法少年

【Nコード】

N7199U

【作者名】

平成貴族

【あらすじ】

「君のいやらしい目つき、なかなかよかったよ！ この中からご褒美を選んでね！」ちよつとドジな高校生東西巡は、ある日曲がり角で美少女とぶつかりスカートの中を見てしまう。彼女は同じクラスの転校生でなんと魔法少女だった！……とベタベタな展開になるはずが、彼女は魔法少女である前に極度の変態だった。魔法によって無理やり超絶美少女に変貌させられた巡の貞操やいかに？ かなりアホな変態コメディです。 性転換や下ネタとがありますので注意してください。

プロローグ（前書き）

下ネタ多し。注意してください。

プロローグは飛ばしても問題ないです。

むしろ飛ばした方がいいかも？

プロローグ

わたし、魔法少女メルちゃん！

今日もバイブ機能付きのホウキにまたがって、空から愚民共を見下ろすよ！

あ、違う。ホウキのリリちゃんに乗って、お空をお散歩するの。間違えちゃった、えへっ！

こうしてお空を飛んでいると、いろいろなものが見えてくるよ。ほら、男の人が女子トイレから出てきたよ。不思議だね。すっごくいい。今はあんな小さいカメラがあるんだね。

お父さん、深夜だからってお外に出るときは服を着なきゃだめだよ？

あつ、洗濯機の中から……お兄ちゃんそれはもう洗っちゃったよ。お。ざくんねん。

それにしても地上では下衆共が醜い争いをしていて、愉快だよね！ 人類とかさっさと滅べばいいのに。

うそうそ。ジョーダン。つい本音が出ちゃった。

わたしの使命は世界の平和を守ること。

魔法で困っているみんなを助けるの。

どこかに事件はないかなあ。

……そう、わたしは常にカオスを求めているのよ。

欲求を満たすただけに醜悪な行為に及ぶ愚かな人間。

そして人々の絶望に満ち苦痛にもだえ苦しむ表情。

もつと世界に混沌を！ 破滅を！

はっ！ いっけない、ちょっとスピード違反。

リリちゃん、そんなに飛ばしちゃダメじゃない。

もう、よだれが空中にただ漏れじゃないの。

あっ！道端でなにかもめているみたい。
いやだ、感じちゃう。じゃなくって大変、すぐに行かなきゃ。

「なめとんのかわりや！？ ああん？」

「……す、すいません」

「あたつとんじゃ肩が！ 慰謝料百万じゃ！」

「そ、そんな……」

黒光りするサングラスに黒光りする頭のおじさんが怒ってるよ。
いや〜んこわ〜い。

きつとアレもギラッギラに黒光りしてるんだろね。

怒られてる方の男の子は、ちよつとこじらせてそ。

こういうときは視線を斜め四十五度に落として早足で歩きましょう。
すたすたすた。

はい、何事もなく通り過ぎました。これで安心。やったね！

え？ 魔法はどうしたって？ わかってるよお。今のはお・や・
く・そ・く。

じゃあいくよ。

早く戦争になあれ！

テロテロリン。

「ラチ明かんわ、おつ、ちつとウチんとこまで付きあえや。若い衆
がヒマしとるからの」

「うつ、く、苦しい……誰か……」

あつ、間違えちゃった。かねてからの願望が口に出ちゃったみたい。

でもこれはこれでありだね。きっちりオトシマエつけないとねえ？　かわいいそう？　しょうがないなあ。今回だけだよ？

はーいいくよ。

みんな優しくなあれ！

デンデンデンデンデン。

「に、兄ちゃん……。今の……ええタッチやったわ……。よう見たらええ体しとるやんけ。ちょっと付き合わんかい」

「……は、はい。こんなの初めてだから……恥ずかしい」

「怖がらんでええ……優しくしたるわ」

「お、お願いします……」

こうして二人は夜の雑踏に姿を消しました……。めでたしめでたし。

あ、いっけな〜い！　もうこんな時間。帰ってお薬飲まなきゃ。湿ったパンツも交換しないと。

じゃっあね〜。ばいばい。

ブローグ（後書き）

ブローグ？ なのでしょうかこれは。
最初だけです。

外法少女登場

東西巡はあせっていた。

朝の日差しが照りつける中、鞆を脇に抱え息を切らして通学路を全力で駆け抜ける。時間が時間なため、周りにほかの生徒の姿はない。

……まずい、このままじゃ三日連続遅刻だ。おとといは携帯のアラームを設定するのを忘れちゃって、昨日は携帯が電池切れで死んだ。今日はバッチリ時間通りに起きたんだけど、それでほっとしてのんびりしていたら家が出るのが遅れてしまった。

ああーやばい、どうしよう！

巡は汗を滝のように滴らせながら困惑の表情を浮かべる。

多少の遅刻ならそこまで思いつめる事もないのだが、そこは彼の性分である。いたるところでポ力をやらかす彼は、なんとかそれを改善しようとまじめな学生であるよう心がけている。

だがその考え方が少しずれているところもあり、逆にその態度が裏目に出してしまうことも少なくない。

とにかく彼はとっても急いでいた。

学校まであと少し。赤信号で足踏みした後、スタートダッシュで横断歩道を渡るとそのままの勢いで見通しの悪い角を曲がった。

「うわああつ！」

「きゃっ！」

悲鳴とともに何かがぶつかる衝撃。巡はやわらかい物で弾かれるように後方へふっとんだ。

反射的に閉じた瞳を開くと、そこには同じ学校の制服を着た少女が尻餅をついていた。

巡は少女のスカートからわずかにのぞく水色のパンティに一瞬気

を取られたが、慌てて彼女に近寄り声をかける。

「ご、ごめん！」

「あいたたた……」

セミロングのツインテールが似合う少女はゆっくりと身を起こす。
くりくりした瞳と目が合った巡は、少しどぎまぎした。

……かわいい子だなあ。見たことないけれど、同じ学年かな？

「だ、大丈夫？」

「うん、へーき。それより……」

少女はにこつと笑うと明るい声で言った。

「君が東西巡くんね。よろしくねっ」

「な、何で僕の名前を……」

「魔法の力だよ。ま・ほ・う」

少女は何かのプリントを手にながら言った。

「魔法？ …… ああつ、それは僕的答案用紙！ ていうかそこに名前書いてあるし、魔法じゃないじゃん！」

「魔法でそこに落ちてるかばんから答案用紙をちよるまかしたんだよ？ …… どれどれ、以下の英文を日本語に訳しなさい。うーんと、彼は大通りをまっすぐ進み、小学校の門をくぐると身に着けていたものを全て脱ぎ捨て……」

「そんな答え書いてないよ！」

「だから点数が低いんだね。いっぱい間違えてるよ」

「そんな問題出るわけないでしょ！ 間違ってもそんな答え書いたら人格を疑われるよ！」

なんなんだろうこの子は……。魔法とか何とかって。

何でもいいけど出来が悪かったからその答案用紙は返してほしいんだけどな……。

あつ！ こうしてる場合じゃない、早く行かないと遅刻する！

「ごめん、急ぐから！」

「待って！」

鞆を拾い上げ身を翻す巡を呼び止めると、少女はベルトを掴んでぐいぐいズボンを引っ張った。

横ではなく明らかに下方向に力が込められていたため、巡はズボンを脱がされそうになる。

その上なぜかチャックを下ろされかけていた。

「ちょっと……なにすんの！ ……なんなの？ 用があるなら早くしてよ！」

ズボンを抑えつつ強い口調でとがめる。

巡は遅刻が気になってつい語気が荒くなっていた。

「あのさ、さっき君わたしのパンツ見たよね？」

突拍子もない質問にぎくりと体が固まる。

僕はパンツなんて見ていない。見たのは水色の布きれだ。

「いやっ、み、見てないよ」

「正直に言わないと握りつぶすよあ？」

笑顔でそう言い放つ少女に恐れをなした巡は、正直に答えること

にした。

「いえ、見たというか。み、見えました……」

あくまで偶然見えたというスタンスだけは崩さない。確かにこれは嘘ではない。

……なにを要求されるのだろう。嫌な予感がする。

「だよね。だからあ、ごほうびをあげようと思って」

「え？ 褒美？」

罰じゃないのか……？

「君のいやらしい目つき、なかなかよかったよ」

「僕そんな目してないって！ ていうかなに『よかった』って！」

「とっにつかつく、評価してあげます。好きなのをこの中から選んでね」

ポケットからさっきのプリントを取り出しピラッとひるがえす。
すると答案用紙の裏に光る文字が映し出された。

『魔法を使えるようになります。ただし二次元にしか興味がなくなるよ』

『超イケメンになります。ただし男の子にしか興味が沸かなくなるよ』

『女の子になります。ただし八十歳以上の異性にしか興味がなくなるよ。超熟専。今一番人気だよ！』

「ただしのがきつすぎるよ！ やっぱりご褒美じゃないじゃん！」
「おすすめは女の子かなあ」

「それ一番最悪じゃないの!? 別に女の子になりたくないし、デメリットしかないよ!」

「ねえ、早くうゝ。どれにするの?」

「どれにもしないよ! だいたいその三択しかないの!? おかしいでしょ!」

「それ以外? うゝん、その場合は……………やっぱ『死』かなあ」

「なんでいきなりそうなるの!? とにかく全部嫌だよ!」

「えっ! 全部? よくばりさんだねゝ。……………うん、任せて。難しいかもしれないけど、わたし、やってみる!」

「ち、違っ! ちよつと、待って!」

慌てて弁解しようとするも、体がいうことをきかなくなっていた。

少女は怪しげな呪文を口にする。ブツブツと詠唱が続く間、巡は金縛りにあつたように動けなかった。

ちよつと、なんかよくわからないけどやばい! 魔法っていうか呪いみたいだよこれ!

少女は呪文を唱え終わると、いつのまにか手にしたバットほどの長さの棒をえいやつと振り下ろした。

ピカッ!

次の瞬間巡の体を中心に目もくらむような閃光が広がった。

「うわああああ!」

金縛りから開放された巡の口をついて出たのは、男性のものとは思えないほど甲高い悲鳴だった。

外法少女登場2

「はい、できあがり」

陽気そうな少女とは対照的に、あたふたと自分の体を触りだす巡。時おり「ひいっ」とか「わっ」だとかおかしな叫び声を発している。

「ああっすごい、いい、いいよめぐるちゃん。その反応、その表情！」

「ち、ちよつとやめて！」

少女は巡に近づくと、ごそごそとその体をまさぐりだした。それはまるで痴漢常習者のような、熟練した手の動きだった。

「ま、まさかこんなに可愛くなっちゃうなんて……。わたし、新しい何かに目覚めそう」

呼吸を荒げた少女は、巡に抱きつき制服の上から生まれたての双丘に顔をうずめた。

「あっ。いや、や、やめて……。だ、誰か。ああっ」

まばらな通行人もちよつといぶかしげな顔をするだけで、助けに入るものはいない。

離れて見る分には、女子生徒が男子生徒にまわりついていようにしか見えないからだ。

すれ違ふ男性の多くは、朝っぱらから美少女と乳繰り合っている

巡のほうに殺意を覚えるくらいだった。

「すーはーすーはー……。あーええ匂いや……。……はっ！
いけない、わたしっいたら一体なにを」

「一級の痴漢行為だよ！ 離れてよ！」

「ふーあぶなかった。服装が逆だったら通報されてたね。女の子には優しい時代だね、女でよかったあ」

「ふー、じゃないよ！ なにするんだよいきなり！」

「そんなあ、わかるでしょ？ 可愛い子を見たらおっぱいに顔をうずめて深呼吸したくなる気持ち」

「思ってもふっはやらないんだよ！」

「危険だよめぐるちゃんその容姿。絶対襲われちゃう。ていうか隙あらば襲う」

「何言ってるのやめてよ！ 大体これ君がやったんでしょーが！」

もともと中性的で整った顔立ちをしていた巡は、とんでもない美少女に変貌していた。

体は丸みを帯び柔らかくなり、肌は透き通るように白く繊細に。膨れ上がった乳房はそれほどの大きさではないが、制服のブレザー下からわずかに存在を主張する。

髪型に変化がないのが唯一の救いか。それでもベリーショートと比べると長い。

……本当に女の子になっちゃったみたいだ。胸がへんだし股間がすーすーする。ど、どうしよう。

困惑する巡の耳に、登校終了時刻を告げる学校のチャイムが聞こえてきた。

彼はもう一息というところで変態につかまり、間に合わなかったのだ。

さらに放心状態になる巡。

「どうしたのめぐるちゃん？ おもらし？」

「違うよ！……これで今日も遅刻確定だ」

「……はるかにすごいことが起こったのに、そんな事を気にしてるの……？ メルちゃんちよつとびっくりよ」

「……それも込みで」

「だいじょうぶ！ 遅刻なんて帳消しにできるよ！ 魔法の力で！」

「えっ？ほんと？」

「うん。こうやってステッキをかざして、『セイクレッドフレア 激烈聖炎魔法！ 通称セフレ』ってやれば学校なんて一瞬で灰燼と化すよ！」

「だ、ダメだよそんなの！ 帳消しっていつかみんな無に帰っちゃうよー！」

「せーの、セイクレッド……」

「ちよつと何振りかぶってんの！」

巡は魔法を阻止すべくメルに飛び掛かった。

ステッキを持つ手を掴んだ拍子に、バランスを崩し地面に倒れこむ二人。

ゴドツとアスファルトに骨が打ちつけられるような音がした。

「いたたた……」

「う、ううん……」

「だ、大丈夫？ すごい音したけど」

「……やだ、めぐるちゃん大胆……」

「うわ、ちょ、放して！」

馬乗りになった巡は、下から背中に腕を回され一方的にしがみつかれていた。

必死に振りほどいて立ち上がろうとするが、筋力が弱まったのか

メルの方が異常なのか身動きが取れない。

メルはうつとりとした表情で、スカートがまくれるのも構わずさらに足を絡み付ける。

……な、何て力だ。なんかいろんな関節が決まっている気がする。まずいぞ、下手すると男子生徒が女子生徒を押し倒しているように見られるかも！

もし警察に捕まったら男装した変態女扱いされる！

かなりの危機的状況であることに気づいた巡は、手足をじたばたさせて抵抗を試みる。

だがその試みもまったく無駄であった。

「おーい、お前ら朝っぱらから何やってんだー？」

その時、だらしないスーツ姿の男性が乗っていた自転車を止めて声をかけた。

巡は一瞬血の気が引いたが、その声の主が誰であるか気づくと、もがきながら助けを求めた。

「あつ、先生。僕です、東西です！ 助けて下さい！」

「おー、東西か。なあ、先生はおおらかなほうだけどな、さすがに道端で強姦はよくないと思うぞ」

「ち、違います、よく見てくださいよ！」

「うん？ これは……逆レプというやつか。勉強になるな」

「見てないでどうにかしてください！」

男性は巡の担任久世泰平^{くぜたいへい}。生来のずぼらなのんびり屋である。

温厚で優しそうな顔つきをしているが、性格が災いしてか三十路に突入するもいまだ独身。

久世はしばらく二人の様子を眺めていたが、自分が教師である事を思い出しメルを引き剥がしにかかった。

メルの腕に久世の手が触れると、急に締め上げていた力が緩まる。バツと巡が呪縛から逃れると、メルは衣服をただしゆつくりと立ち上がった。

「いけない。わたししたらこんなところで……」

「場所も問題だけど、根本的におかしいことがあると思うよ」

「ごめんね、めぐるちゃん。ちょっと後頭部を打ったみたいで意識が……」

「なかったとは言わせないよ!？」

「あつただけどつい素がでちゃって」

「なにそれ怖い！ やっぱり無意識に体が動いた事にして!」

「えへっ」

メルは後頭部をさすりつつペロツと舌を出す。

その姿が獲物を前にして舌なめずりしているように見えて、巡は背筋が凍るのを感じた。

外法少女登場3

「お前らー、遅刻だぞー。こんなところでAVの真似事してる場合じゃないぞ」

「そういう先生だつて遅刻だよ」

「俺はいいんだよ。教師だから」

「それもつとダメでしょ」

巡とは正反対に余裕の久世。すでに彼の遅刻は常習化しているが、人徳のなせる業かあまりそれを非難する人間はいない。

「ん？　ところでお前、なんか……」

久世はじろじろと巡を眺めだす。

自分が女になった事を半分忘れかけていたおバカな巡も、その視線に気づきさつと身を縮こまらせる。

そんな彼をかばうようにメルが素早く前に出た。

「先生！　めぐるちゃんをいやらしい目で見るのはやめてください
！」

「君にそれを言う資格は絶対ないからね！　人に言う前に自分に言い聞かせて！」

久世は不思議そうな顔をする。

「いやらしい……？　うーん、東西が昨日と別人に見えるような？」

「き、気のせいじゃないですか？」

「そうですよーめぐるちゃんが女の子になって犯さ……うぷっ」

巡はメルを口を手で塞いだ。

……僕をかばいたいのか陥れたいのかわからないのでしゃべらせない方がいいな。

「なんだか東西を見てると変な気分になりそうだ。不調みただし今日は早退しようかなー」

「……そんな簡単に休まないで下さいよ」

「あーそーいや今日は転校生が来るんだった。ダメかー、しょーがない、めんどくさいけど行くかー」

久世は脇に止めておいた自転車に再びまたがると、ゆっくりとペダルをこぎだす。

「先行ってるぞー」と言い残しのろろと学校の方へ向かっていった。

残された二人は自転車を見送りつつ立ちつくす。

そのうちメルが押さえつけられていた手の指をしゃぶりだしたので、巡は慌てて腕を引いた。

「じゅる……。危なかったねめぐるちゃん」

「むしろ二人きりの方が危ないよ」

腕をさわさわしてくるメルの両手を振り払って言う。

すぐ近くで熱い視線を感じつつも、巡は頭の中で今の状況を整理していた。

ちよつと抜けていて適応が遅い彼でさえ、自分の身に起こったことがどれだけ大事か改めて感じ始めていた。

「ねえ、この体元に戻してよ！」

「えっ？　なんで戻りたいの？　それだけ可愛ければこれからの人

生超イージーモードだよ？」

「そ、そういう問題じゃなくて、いきなり女の子とか……困るよ」

「そっかな。もとからガチムチって感じじゃなかったし、男の腐ったような感じだったからいいんじゃないのかなあ？」

「そんな……ひどいよ」

「めぐるちゃんが全部って言うから叶えてあげたんでしょ？ メルちゃん頑張ったんだから」

「全部って……めちゃくちゃだよこんなの！」

「つまりめぐるちゃんは超可愛い女の子になって魔法が使えるようになったんだよ。ただし二次元のおじいさんしか愛せないけど」

「ただしのほうもあわせ技！？ それってどうなっちゃってんの！？」

「つ・ま・り亀仙人でオ ニーするしかないよね！ やだ、めぐるちゃんたらすごい変態！」

「君にだけは言われたくないよ！ なんてことするんだよ！」

「だいじょうぶ。ちゃんと抜きどころを探しておいてあげるから」

「いらないよ！ 大体ないでしょそんなところ！ いいから元に戻してってば！」

泣きそうになりながら懇願する男子生徒と恍惚の表情でそれを見返す女子生徒。

はたから見るとかなり異常な光景だった。

『ああ……たまらないよめぐるちゃんのその表情。今すぐ押し倒してむしゃぶりつきたい……』

「む、むしゃぶり……？」

「あれ？ 声に出ちゃってた？」

「なんか直接頭に聞こえたような……」

「すごい、わたしのテレパシーを受け取ったのね！ 早くも魔法の力に目覚めたのよめぐるちゃん！」

「て、テレパシー？ ていうかそんな危険な妄想垂れ流さないでよ！」

「これでわたしの本当の気持ち……わかってくれたでしょ？」

「なにその告白！ 本当っていうか最初から裏表なかったよね！？ 全然ぶれてない！」

「ツンデレのデレがきたんだよ？」

「ツンなんかあった！？ それにデレとかそういう次元じゃないよ！ ドロツドロだよ！」

「違うよお、ぐっちよぐちよだよ」

「……それ以上近寄ったらぶつよ？」

「うん。ぶつて。思いっきりね」

脅しにもまったく動じることなく、変態少女は目を血走らせてにじりよってくる。

貞操の危機を感じた巡は、襲いかかる魔の手をどうにかかわすとわき目もふらず一目散に学校へ向かって全力疾走した。

転校生は美少女？

巡の所属する二年B組の教室内は、いつも以上にぎやかだった。男子生徒の間では今日来るはずの転校生の話題で持ちきりだ。ものすごい美少女がやってくるという噂が飛び交っていた。

すでに朝のHRの時間は始まっているが、担任の姿がないため室内は無法地帯である。

巡はこそそと教室に入ると窓際から二番目の一番後ろの自分の席へ。

普段なら彼の遅刻をからかう輩が集まってくるのだが、今日ですでに転校生の件で盛り上がっているため、巡は無事に自分の席までたどり着いた。

「……巡くん、また遅刻？」

「ち、ちよつといろいろあつてさ……」

「これで三日連続なんだけど？」

「あ、はは……」

「笑つてごまかせばいいと思つてない？」

「い、いえそんなことは」

「ふん、全く……」

隣の席の女子が本から視線を外す事もなく巡を詰問する。

その不機嫌そうな態度にびくびくしながら巡は気まずそうに席に着く。

肩までかかるポニーテイルとやや気の強そうな切れ長の目。

彼女はクラスのマドンナ的存在、御厨花奈^{みくりやかな}。

容姿端麗、成績優秀、高い運動神経という三拍子揃ったパーフェクト美少女だ。おまけにクラス委員長まで務めている。

だが性格はややクール。近づきたいオーラを常に発し、特に男

子に対してはそっけない態度を取る事が多い。

それでも彼女の人気は凄まじく、その知名度たるや学校全体でも五本の指に入るほどだ。

その冷たい態度が、逆に不可侵性を高め人気をかさ上げしているのだ。

巡は前回の席替えで驚異的な幸運でそんな子と隣同士、かつ一番後ろの席というポジションを引き当てた。

だがいつもは緊張して口々に話せないし、事あるごとに威圧されるため彼女のことが苦手だった。

もちろん嫌いというわけではなく、できればお近づきになりたいと思っっているのだが、うまく会話が弾まないのだ。

しかし魔法により異常性癖者になってしまった今日の巡は一味違った。

「今日は転校生が来るみたいだね」

花奈は少し驚いたように巡を見る。彼の方から話を振られたのはおそらくこれが初めてだったからかもしれないからだ。

だがすぐに本に視線を落として答える。

「そうね……。女の子らしいけど」

「可愛い子なのかな？ でもさすがに御厨さんにはかなわないだろうね」

「そうね」

「あははっ」

巡はなるべく低い声を出すよう努めている。元から声が高い方だったのでそこまでの違和感はない。

だが花奈はするどくその変化を指摘した。

「なんか声が変わ。風邪でも引いた？」

「えっ？ いやそんなことない……、あっ、そうそうちょっと風邪
ぎみで」

「うん？」

再び本から顔を離すと、不審そうに巡の顔をのぞきこんだ。
じーっと無遠慮に見つめること数秒。

いつの間にか二人の顔が目と鼻の先まで接近していた。
そして。

ぶちゅっ。

唇と唇が触れ合った。

「わああっ！ な、なにすんですか御厨さん！」

慌てて両手で体を押して花奈を引き離す。

「あなたこそなんなの？ そんないやらしい唇して」

「い、いやらしいって……？」

「脱ぎなさい」

「はい！？」

「私が薄汚い男になんて発情するはずがないわ」

「それと僕が脱ぐ事と何の関係が！？」

「いいから黙って脱げおらあ！」

「ひいひいっ！」

生徒達は教室のそこかしこで騒いでいるので、端っこの席で起こる凶行を特に気にかけるものはいない。

乱暴に巡の制服に手がかけられたとき、ガララと前方の引き戸が動き担任の久世が現れた。

「おらー静まれー、猿どもー」

ついに話題の転校生がきたとばかりに教室内は一気に静まり返り、教壇のほうへみんなの注目が集まる。

花奈の手も止まった。

「じゃあお待ちかねの転校生だー、ほら入って来い」

久世は教壇から廊下へ向かって手招きする。

一斉に集中する視線の先から、一人の女子生徒が入室する。

久世の横で立ち止まると、彼女は向き直ってあいさつした。

転校生は美少女？（後書き）

大まかな流れはものつすごいベタです。
ただ断っておきますが登場人物は九割方変態です。

転校生は美少女？ 2

「初めまして！ わたし潮見夢留しおみゆめるって言います。ピッチピチの女子高生でえす！ メルちゃんって呼んでねっ！ 早くみんなと仲良くしたいな。よろしくね！」

「うおおおお！」

メルがうさんくさい出会い系プロフのような自己紹介をすると、予想を超えた美少女の登場にどこからともなく沸きあがる男子たちの歓声。

「きゃー！ きゃー！」続いてなぜか起こる女子の歓声。

「わたし、今まで男の人と付き合ったことなくて……だからその……いやだ！ メルちゃんったら恥ずかしい！ なに言ってるんだろ」

メルのわざとらしい処女アピールが終わったところで、喚声は最高潮に達した。

メルは恥ずかしがる振りをしながら、室内をきょろきょろと見回す。明らかに獲物を探す目つきだった。

そして隅の席で机に突っ伏している巡を目ざとく発見した。

彼はメルが教室に入ってきた瞬間、花奈が固まると同時に隠れるようにして顔を伏せていたのだ。

「さて小芝居はもういいかー？ さーて潮見の席は、と」

先ほどメルの痴態を目の当たりにしていた久世はなんともなしに言う。

「先生、わたしめぐるちゃんの隣がいいです！」

びしっと巡を指差して言う。

「あー東西か。お前ら仲良さそうにしてたもんなー。まー好きにしろ」

「やったあ！」

クラス中から「めぐるちゃん？」「知り合い？」「巡の野郎、どういうことだ？」などといった疑問の声が上がる。

メルはおかまいなしにずんずんと巡の席に歩み寄る。

そしてかたくなに顔を伏せているその首筋にふっと息を吹きかけると、巡は「わあっ」と顔を上げた。

「どしたのめぐるちゃん、気分でも悪いのかな？」

「なんで、君が……」

「君だなんて、メルちゃんって呼んでくれなきゃいたずらしちゃうよ？」

「め、メルちゃん。……ま、まさか転校生で同じクラスだなんて」

「なんて僕はついてるんだろう！」

「変なモノマネしないでよ！ その声全然似てない！」

どうなってるんだ一体。僕はどうすれば……。

巡は目の前の光景を認めたくなかったが、メルがここにいるのは紛れもない事実だ。

彼は観念して思考を止めた。

「メル……久しぶりね」

その時横の席に座っていた花奈が、メルに向かって言い放つ。

「あつ！ クリちゃんだ！ クリちゃんこんなとこにいたの！？」
「ぶっ！ その呼び方はやめなさいって言ったでしょ！」
「みくりや、のクリだよ？」
「なんでそこ抜き出すのよ！ ミクちゃんとかカナちゃんとかいくらでもあるでしょ！？」
「まさかクリちゃん、変な想像して……」
「黙りなさいこの変態女！」
「なにさ自分だって！」

二人が話し出すやいなや、いきなり険悪なムードになる。

「ねえ、クリちゃんその席どいてよ」
「なんで私がどかなきゃならないの？」
「ふーん、じゃ闘うしかないね」
「望むところよ。わからせてあげるわ、真の天才が誰なのか」
「一瞬で消し炭にしてあげるよ」

さらにヒートアップする二人。メルが発言に巡は肝を冷やす。
め、メルちゃんまさか魔法を使うつもりじゃ……。いきなり闘うとかって単語が出る時点で普通じゃないよ。
彼は自らを女に変えたメルの恐ろしさを知っている。
このままにしておくとか何がどうなるかわかったものじゃない。
嫌な予感がした巡は慌ててメルを止めに入った。

「メルちゃんダメだよ、魔法なんか使ったら！」
「えっ、なんで？」
「巡くん、大丈夫よ。私も魔法使えるもの」
「え？」
「気をつけてめぐるちゃん、その女、とんでもないレズだよ！！！」

「ええっ！？」

「なるほど……、メル。巡くんのこれ、あんたの仕業ね」

「なんか納得してる！？ ていうか否定は！？ 早く否定して！」

「クリちゃんは可愛い女の子なら見境いなく食べちゃうんだよ！

近寄っちゃダメ！」

「そんな……。でもメルちゃん自分だってそうだよね！？ 人の事
言えないよ！」

「わたしは違うよ！ だってわたしバイだもの！」

「全然違うくないよ！ もっと危険じゃないか！」

メルの発言に教室内はどよめきに包まれる。

口々に言い合うクラスメイトたち。

「バイかよ……。これでこのクラス四人目か……」 「それなら私にも望みがあるわ！」 「いえ私よ！？」 「花奈ちゃんやつぱり……俺はこれからメルちゃんに生きる」 「何よあの女、私の花奈様に……！」

もうやだこのクラス……。

「お前からまだホームルーム中だぞー。レズだのホモだのは休み時間にやれー」

「違います先生！ バイセクシャルです！」

「あー悪い悪いバイな」

そんなの謝らなくていいよ先生……。それに休み時間でもやらないでほしいんだけど……。

「潮見は転校生用に持つてきといた机使えー。隅に置いてあるやつ。それとそんなに隣がいいなら右隣にしとけばいいだろー」

メルは結局窓際から三列目の一番後ろに机を置く事になった。
机をやや巡通りに寄せて満足したように席に着く。

ほぼ総立ちになっていたクラスの面々もおのおの着席した。

「じゃあーさつさと始めるかー。えー、今日は特になんもないなー。
もうそろそろ秋だからなー。季節の変わり目には変な人が出没する
から気をつけるよー」

「はあーい！」

メルちゃんいい返事だなー。自分のことだって自覚してくれれば
いいんだけどなあ。

「じゃー終わり。あ、そうそうー時間目の英語なんだが、清水先生
警察に事情聴取されてるから遅れるらしいぞー。来るまで自習なー。
ん？ 何で事情聴取されてるかって？ 駅で痴漢と間違われたらし
いぞー、本人が電話でそう言ってたそうだ。まー大方本当にやった
んだろうけどなー。もう会えないかもなー」

久世はほんの少しだけ残念そうに言い残すと、さつさと教室から
出て行った。

かなり適当なホームルームだったが、いつもこんな調子なのでみ
んなもう慣れっこなのだ。

生徒の間に事件を起こした先生の事が話題に上る事はなかった。

みんなわりとどうでもよかった。

そんなことより関心は転校してきた美少女に向けられている。

再び騒がしくなる教室。

いつしかメルの席を取り囲むように人垣ができていた。

転校生は美少女？ 3

クラスメイトによるメルへの質問攻めが始まった。

「趣味は？」「好きな食べ物？」「血液型は？」「どこに住んでるの？」「好きなタイプは？」「スリーサイズは？」「今日は何色のパンツはいてるの？」「初経はいつ頃？」「オニーは週何回？」

メルはにこやかに全ての質問に答えている。

その横で巡はずっとうつむいたままだ。

彼は女の子になった自分の異変にいつ誰が気づくかもしれない恐怖に、生きた心地がなかった。

時おり起こる笑い声にびくつきながら身を縮こまらせていると、左隣の花奈がひそひそ耳打ちしてきた。

「ねえ、女の子になるってどういう気分？」

疑う様子もなくそう問いかけてくる。巡はその一言に心臓が止まりそうになった。狙いを研ぎ澄ました一撃。

だが努めて平静を装いとぼけてみせる。

「な、なんのことだかさっぱり……」

「隠しても無駄よ」

彼女の狩りセンサーはいち早く巡の正体を見破っていた。

なぜかメルと知り合いだった彼女は、巡がおそらく何らかの魔法をかけられたのだろうと当たりをつけたのかもしれない。

確信を含んだその強い口調に言い逃れはできないと悟った。

「で、できれば秘密に……」

「いいわよ。その代わり……、わかってるわよね？」

妖しく微笑む花奈。理解が追いつかなかったが、不吉な予感だけははつきり感じとった。

「私はとことん質にこだわるの。その中でもあなたは過去最高の逸材よ」

「あの、ちよつと何を言っているのか……」

その時一時間目のチャイムが鳴る。隣ではあらかた質問も尽きたようで、これが合図になったのか一度解散になった。

みんな席に収まりはしたが、やはり教師が来ない。自習といってもほぼ休み時間と変わらない状態だ。勝手に席を出歩いているものもいる。

とはいえあまりうるさくすると隣の教室から教師が怒鳴り込んできくため、先ほどよりややトーンは落ちていた。

「じゃあ手始めに女子の制服を着てもらいましょうか」

「全然秘密にしてくれる気ないよねそれ」

巡はまだ花奈に絡まれていた。とはいっても隣の席なので逃げようがないのだが。

「ちよつと、わたしのめぐるちゃんにちよつかい出すのやめて欲しいんだけど」

メルが二人の間に割って入ってきた。

「相変わらずねメル……。にしてもあんた、性転換魔法なんて禁呪

レベルのものをためらいなく使うなんて……。小学校に戻って道德の授業だけ受けてきなさいよ」

「わたしだって悩んだんだよ？ めぐるちゃんを他の女に取られないようにするために苦渋の決断を」

「うそつき！ ノリノリだったよね！？ しかも変な性癖までつけてくれちゃって！」

「だーからあ、それもめぐるちゃんがメルちゃん以外の女の子に目移りしないようにって。ぜーんぶめぐるちゃんのためなんだよ？」

「全部自分のためでしょ！ 大体僕がメルちゃんに惚れてるって設定からしておかしいよ！ 目移りもくそもないよ！」

「またまたあゝ」

「またまたじゃないよ！」

花奈が不敵な笑みを浮かべメルに言う。

「メル、裏目に出たわね。すでに巡君、いえ巡ちゃんのお口は私がおいしく頂いたわ」

「ええっ！？ そ、そんな！ めぐるちゃんの下のお口が蹂躪されつくしちゃったの！？」

「そんなこと誰も言っていないよ！」

「なんてこと……。く、くやしい……。あれ？ でもなんか興奮する……。なにこの胸の高鳴りは……」

「さあ巡ちゃん、さっきの続きをしましょうか」

「ああっ！ ダメめぐるちゃん！」

「……メルちゃんちよつと落ち着こうよ。さっきからおかしいよ呼吸荒すぎだよ」

「は、はあはあはあ……。これが寝取られ……。？ 新たな性癖に目覚めそう……」

「お願いだからもうこれ以上進化するのはやめてよね……」

メルは高潮させた頬に両手をやる。
棒立ちのメルを横目に花奈はちよいちよいと手招きする。

「さ、巡ちゃん。バラされなくなかったらこっちに來てご奉仕なさい」

「嫌だよ！ 急にどうしちゃったの御厨さん！ そんなキャラじゃなかったでしょ！？」

「あまりにも巡ちゃんが可愛すぎて理性が飛んだの」
「その割には冷静だよね！？」

「私の理性がちょっとでも残っている間に早くしなさい！」

「ひえっ！ む、無理だって！ それにこんなところで騒いでたらみんなから注目浴びちゃうよ！

「私は見られた方が燃えるの」

「僕は絶対嫌だよ！ ……メルちゃん、うつとりしないで助けてよ！」

メルは呼びかけにも答えず恍惚の表情で言い寄られる巡を見つめていた。

……完全にツボ入っちゃってるよ！ もうダメだこの人！

「はあはあ……ああダメ……。もうガマンできない。でもここでオニーしたらめぐるちゃんに嫌われちゃう……」

うわあ、やばいよ、やばいテレパシー届いちゃった！

僕に嫌われるっていうか転校初日から社会的信用を失うよ！

『ああ……めぐるちゃんの蔑んだ視線を感じる……。なんていい目をするの……。それだけでわたしもう……。でもダメ。このままだとちよっと変な子だと思われちゃう』

大丈夫、安心して！　もうとつくに変態通り越してるから！

巡は一方的に発信される放送禁止電波にただただ戸惑うばかりだった。

転校生は美少女？ 4

その時教室の引き戸が音を立てて開いた。

話し声が止み、クラス中の視線が一気に前方の出入り口に集まる。

「おはよう諸君！」

現れたのは一人の男子生徒。よく通る声で誰にともなくあいさつをしたが、誰一人返事するものはなかった。

クラスメイト達は何事もなかったかのように再びおしゃべりを始める。

「うち、面倒なのが来たわね……」

花奈が抵抗する巡の腕を引っ張りながら舌打ちする。

クラス全員から無視された男子生徒は、巡の前の席、すなわち自分の席に向かって歩き出した。

その間も彼は笑顔であいさつを振りまくのを忘れない。

周囲からは「あ、ああ……」「お、おはよ……」「ち、近寄るな！」「俺が悪かった！」といったあいさつが返ってくる。

そして最後に花奈の魔手を振りほどいた巡の前で立ち止まった。

「グッモーニング、巡」

「あ……うん」

横流しに垂らした長めの前髪をさつとかきあげ、綺麗に生え揃った白い歯を見せて笑う。

彼の名は美道衆^{みどうしゅう}。クラス中から腫れ物扱いされている彼は、これだけでいってしかし芸能人負けの美少年である。

自己愛の強い性格である彼は、根拠のない自信に満ちた言動が多くいちいちウザい。そして寒い。

とはいえ一年B組の生徒達は比較のおおらかで優しい子が多い。単純にちよつとウザいからといって人を嫌ったりはしない。

それにモデル並の容姿を持つ彼なら、嫌われるどころかクラスの人気者であつてもおかしくないぐらいだ。

もちろんこれは彼に対するやつかみとかそういう類のものではない。だが彼を擁護する事は誰にもできないのだ。

なぜなら。

美道はナルシストである以前にホモであり変態だった。

その倍がけされた破壊力は想像を絶する。

「ちよつとあんた、遅刻なんだけど？ なに偉そうにしてんの？」

「今日はちよつとな。朝から不良に絡まれている少年を助けていたのだ。もちろんアドレスもゲットした」

「災難ねその子。不良に絡まれた方がずつとマシ」

「はっはっは。早速メールを五件ほど送っておいた」

「笑えない。……あーヘッドが出そうだわ」

花奈は心底嫌そうな顔で吐き捨てた。

嫌悪感丸出しではあるが、それでもクラスで美道とまともに会話できる数少ない存在だ。

「ところで巡。今日は遅刻しなかったのか？ もし今日も遅刻したら何でもボクの言う事を聞くといい約束だったはずだ」

「えっ、あ、いやそれは……」

「残念ね。もう巡ちゃんも女の子なの。あんたの出る幕はないわ」

「……はっ、何をバカな」

ちらつと巡を見やる美道。
巡は慌てて視線を逸らす。

「む？ むむむ？」

さらに顔を寄せてくる美道。

「なん……だと？」

明らかに彼の表情が変わった。

髪型や服装に変化はないにしても、普段から巡をよく視姦している美道にとってその違いは一目瞭然だったようだ。

巡はもはや美道に隠し通すことは不可能だと感じた。だがこうも考えた。

もしかしたらこれで狙われる事はなくなるかも。美道くんがいくら騒いでもみんなスルーするに決まってるし。

ここはおとなしく本当の事を言った方が得策だ。

そして小刻みに体を震わせる美道に向かって言い放つ。

「ぼ……僕、女の子になっちゃったの」

「……そ、そんな……バカなあああっ！！」

絶叫する美道。その叫びは教室内に響き渡ったが、みんな聞こえないフリをして彼の方を見ないようにした。

決して関わってはいけないのだ。

ややあつて美道はその場に崩れ落ち、沈黙した。

ある程度リアクションを予想していた巡だったが、それでも引いた。結構引いた。

花奈は勝ち誇ったようにその様子を見てせせら笑う。

「ふん、いい気味だわ。ねえ巡ちゃん、今のもう一回言つて。なんかよかったわ」

「や、やだよ！」

「いいの？ そんな口の聞き方して」

「あ……あう」

うずくまった美道を一切フォローすることなく放置し、花奈は再び巡にちよっかいを出し始める。

しかしもはや再起不能かと思われた美道は、意外にもすぐに立ち上がった。

その瞳はうつすらと濡れていたが、奥底に達観したような力強さがある。

きつと新たなターゲットのことで頭をフル回転させているのだろう。

「ふう……。ボクとしたことが、取り乱したな。巡はもう死んだ。またひとつ巨星が落ちてしまったが、下を向いてばかりはいられない」

「僕まだ生きてるけど……」

「安心しろ。敵はとつてやるぞ。にしてもなんたる悪行！ どこのどいつだ！ こんな血も涙もない悪魔のような真似をしたのは！」

「……確かにそうなんだけどちよつと怒りの根底にあるものが違うような……」

「巡、誰にやられたんだ！？ 地の果てまで追いかけて男子の良さを説いてやる！」

いきり立つ美道に迫られ巡は困惑の表情を浮かべる。

ど、どうしよっかな……。正直に言ってもいいんだけど、あんまり争いごとが起きるのは避けたいなあ……。

まごつく巡の代わりに、花奈がびしつと指を差して言った。

「犯人ならそこにいるわよ」

「……むう。さっきから危ない表情で呆けたようにつつ立っているからずっと無視していたのだが、一体なんなんだこの子は」

美道がやや当惑した顔で言う。

さすがメルちゃん！ あ的美道くんにも軽く引かれてるよ！

そこには、かの変態少女がなおもうつとりと妄想トリップ中だった。

転校生は美少女？ 5

「おい、その君。何者だ、名を名乗れ」

美道がやや警戒気味にメルへ呼びかける。

「……………めぐるちゃんほらほら、すっごいかめはめ波だよう！
感じるでしょ？」

「おわっ！ 何だ？」

メルの口からブツブツと声が漏れる。だが彼女の視線はどこか宙をさまよっていた。

さらに警戒心を強める美道。

「危険だぞこの女、いきなりわけのわからん事を……………」

「メルちゃん、しっかりしてよ！ ねえ！」

巡がメルの肩を掴んで揺する。するとその瞬間ガツと手首をつかまれたので本気で振りほどいた。

どうやら彼女が覚醒したようだ。

「あら？ わたしったら一体何を……………」

目をぱちくりさせ、よだれを拭うメルに美道が詰め寄る。

「巡を無残な姿に変えたのは君か？」

「わっ、すごいイケメン。なんかいきなり迫られちゃってる？」

「君も花奈と同じく好き勝手している口か」

「わあ、女の子みたいに綺麗。メルちゃんちょっときめいちゃう

かも」

メルは質問を無視し、ちろちろと巡に視線を送りながら言う。

「な、なに？」

「うふっ、冗談だよめぐるちゃん。今はめぐるちゃん一筋だから安心してね」

「いや、僕のことは全然気にしないでいいよ。うん、本当にいいから」

「自分から身を引こうとするなんて。なんていじらしいのめぐるちゃんったら」

巡は頭をなでようと伸ばしてきたメルの腕をスウエーで回避した。さつきからことごとく質問をスルーされ、やや険しい顔つきの美道に花奈が横から口を出す。

「美道、その子がメルよ。あなたも聞いたことあるでしょ？」

それを聞いた美道は少し驚いた表情で口を開く。

「なに？ 君がああメルか……。噂は聞いているぞ。十年、いや二十年に一度出るかどうかの変態らしいな」

「そんなことないよ、せいぜい十人に一人ぐらいだよ」

「……メルちゃんレベルの人がそんなにぞろぞろ出られたらたまらないよ」

「ということは……メル、禁呪を使っただな？ 男を女に変えてしまっただけだよ」

美道も花奈と同じように巡の変化が魔法によるものと考えていた。彼もまた魔法の存在を知るもののようにだ。

巡は花奈と美道、二人の理解の早さに内心驚きながらも不安そうに尋ねる。

「あの、禁呪とかつて物騒な単語出たけど、僕大丈夫なんだよね？」

「だいじょうぶ。ただの魔法だよ、マホウの一種」

「ただの魔法って言われてもすぐひっかかるんだけど……」

「あーあ。にしてもクリちゃんに狙われちゃうんだつたら女の子にするんじゃないかなあ。勢いでやって損しちゃった」

「ちよつと！ そんな簡単に後悔しないでくれる！？ 僕はどんなのさ！？ 責任とつてよ！」

「もちろんだよ。ちゃんとかわいがってあげるよ！」

「そういう意味じゃなくて、元に戻してつてこと！」

「呪いを解くのはさすがのメルちゃんでもちよつと難しいの」

「いま呪いつて言った！ 絶対言った！」

「えへっ」

「えへっじゃないよ！」

ペロつと舌を出すメルにつかみかかりたい気分になったが、近づくと思われる危険性があるため踏みとどまった。

二人のやり取りを見ていた美道が、嘆くようにため息をついて言う。

「うーむ。……お湯でもぶっかけたら男に戻らんかな」

「そんな某二分の一っていう漫画じゃあるまいし……」

「アレを顔にぶっかければ戻るかも！」

「……アレって？」

「やだ、めぐるちゃんわかってるくせに。あの白いにゅるっとした

……」

「うん、わかったからもう言わなくていいよ」

「そうか。ちよつと待ってる巡。今ボクが……」

「やめて。本当にやめて」

ズボンのファスナーに手をかける美道を止める。

美道は不満の表情で巡を見返した。

「何をする巡。何事も試してみなければわからないではないか」

「うるさいうるさい」

「二人とも、なにか勘違いしてる？ メルちゃんが言ってるのと違うんじゃないの？」

「えっ？ じゃ何のこと？」

「うごんだよ？」

「なんでうごんだんだよ！ そんなものかけてどうするのさ！」

「だってえ、ぶっかけうごんって言うでしょ」

「だからって僕の顔面にうごんなんかかけてもなんにもならないでしょ！」

「そっかあ……。でもぶっかけうごんってすごいネーミングだね。メルちゃんいつも恥ずかしくて注文できないの」

「それは変な事考えてるからじゃないの？ それにさっきから連呼してるけどその調子なら楽勝で注文できるよね？」

「なあ巡、ならボクはぶっかけうごんにさらにぶっかければいいのか？」

「衆くんはもうしゃべらないで」

巡は冷たい視線を美道に送った。

だが美道は余裕そうにあごに手をあてながら、改めて巡の全身を眺める。

「……いや待てよ。男装した女子か……。一見男子でありながらもその実女性のような美さ……。……アリはアリだな」

「えっ？」

「メル。少しボクも熱くなりすぎた。君の気持ちもわかる。今回の禁呪は特別に不問にしよう。いや、むしろ感謝すべきか」
「うん。でも巡ちゃんにちょっかい出しちゃダメだよ？」
「はっはっは。それはどうかな。ボクは美道衆。よろしく」

美道が次のレベルに上がったことで、二人は和解した。
変態が握手を交わす横で、巡は一人絶望の淵にいた。
どうしよう。このままじゃ本当に元に戻れないかもしれない。
それに次から次へ変な人が集まって、ものすごく嫌な予感がある。
僕は一体どうなってしまっただろう……。

転校生は美少女？ 6

どんよりと沈む巡に、メルが明るく言った。

「めぐるちゃん、そんなに落ち込まないで。いくらメルちゃんだつてその場のノリで初対面の人の性別を変えて人生を狂わせるような事するわけないでしょ？」

「したよ！ 誰を前にしてそれを言うのさ！」

「怒っちゃいやん。だいじょうぶ、お兄ちゃんに頼めばきつとなんとかしてくれるよ」

「……お兄ちゃん？」

「お兄ちゃんはお兄ちゃんだよ。すごい魔法使えるんだよ。わたしよりずーっとすごい。でもロリコンで童貞だけど」

「ボクもお兄ちゃんにはお世話になっているんだ。あの人はすごいぞ。魔法で大金を稼いだり動かしたりしていて、政界にもコネクションを持つんだ。ただしロリコンで童貞だけど」

え？ どういうことだろう。メルちゃんと美道くんのお兄ちゃん？ 二人は姉弟……、なわけないし。

「お兄ちゃんは魔法を生み出した人で、私たちは彼のつくった魔法学校で魔法を学んだのよ」

首をかしげる巡に、席に戻った花奈が説明する。彼女は少し教室が騒がしくなってきたため注意して回っていたのだ。

表向きは真面目なクラス委員長なのである。

「えーと、なんでお兄ちゃんなの？」

「本人がそう呼んでって言うから」
「そ、そうなんだ……」

巡はさらにこんがらがりそうになりつつも、とりあえず浮かんだ疑問を口にする。

「魔法学校……」

「そうよ。私とメルはそこで知り合ったの」

「やっぱり御厨さんも魔法を……？」

「ええ。その水毛男もそこそ使えるけど、別口で覚えたみたいだから私たちと面識はないわ。同じクラスになって『君魔法使ってるだろう』って言われた時は驚いたわ」

「ボクはいわば監視役だ。魔法は危険だから、乱用しないようお兄ちゃんに命じられているんだ。なのにこの女ときたらやりたい放題で困ってる」

「え？ でも僕そんなの見たことないよ？」

「裏でコソコソやってるんだ。花奈の成績がいいのも運動ができるように見えるのも全部魔法のおかげだ」

「ふん、使えるものを使って何が悪いの？ それに私はメルみたいなとんでもないことはしてないし、その辺はわきまえてるつもりよ」

「わたしなんかしたっけ？」メルが不思議そうに言う。

「メルちゃん、僕だっていい加減怒るよ？」

「いいよ。どんどん責めて。なじって」

メルは全くひるむことなく巡に身をすり寄せようとする。

美道はそんなメルを見てため息をつく。

「ああ、花奈に加えてあのメルまで見張らなければならないなんて。これはお兄ちゃんに一度相談しようか」

「ちよっと、話が違うでしょ。口止め料として私に寄ってきた男子

をあんたに紹介してあげてるじゃない。あんたがその気ならこっちが逆にチクつてもいいのよ？」

「むむ……………。まあここは穏便にいきましょうじゃないか花奈くん」
「ふん、わかればいいのよ」

うわっ、ひどい。すごいズブズブだよこの二人。

でもこれで御厨さんがあまりにも完璧な理由がわかったぞ。にしても一体どういう魔法を使っているんだろうか……。

「さて、もうこの話はおしまい。私はできるだけ事を荒立てたくないの。一応言っておくけど巡ちゃん、もし一般人にしゃべったら……、わかるわよね？」

花奈が巡の体をなめまわすように見て言う。

その視線に悪寒を感じた巡は、無言でコクコクとうなずいた。

「巡…………。できればボクの性癖の事も秘密にしておいてくれないか」
「それは無理。もうみんな知ってる。かなり前から知ってる」
「ははっ、そんなわけないだろう」

陽気に笑う美道を放置し、勝手に携帯で写真を撮ろうとしているメルに確認する。

「メルちゃん、とにかくそのお兄ちゃんって人に僕を元に戻してもらうよう頼んでよね」

「わかってるよう。それは放課後になってからの楽しみ。ほうら、こっち向いて」

本当にわかってるんだろうか……。

巡はマイペースなメルにうんざりしながら、一方的に始まった撮

影会が早く終わるように願っていた。

転校生は美少女？ 7

その後も巡は変態魔法使いたち（主にメル）にいじられつつも、なんとか無事に放課後を迎えた。

メルは教科書がないと言っては巡の隣にべったり寄り、校内を案内して欲しいと言っては空き教室に連れ込もうとしたり人気のない女子トイレに引きずりこもうとしたりで、とてもアグレッシブな一日を送った。

一方の巡はすでに疲労困憊だった。メルの執拗なアタックに加え、時おり花奈や美道と繰り広げられる争奪戦。

美少女転校生と初日からいちやいちゃする自分に向けられるクラスメイトの嫉妬や殺意。

普段それほど目立つことのない彼にとっては針のムシロに座る思いだった。

唯一の救いは巡の変化に気づいたものがいなかったことが。

巡の周囲が騒がしい事に不思議そうな視線を送ってくるクラスメイトもいたが、それでも彼が性転換している、などとは夢にも思わないだろう。

とりあえず現段階では誰もそのことに言及してこない。これも普段からおとなしく女々しい巡の態度のおかげか。

最後の授業が終わって気が抜けるのもつかの間、巡は隣のメルに問いかけた。

「メルちゃん、放課後になっただけ僕を戻してくれるって話、覚えるよね？」

「もっちろん！」

メルは元気よく答えた。この反応なら知らんぷりはされなさそう

だと巡は安堵する。

だがメルが人差し指を口にあて、なにやら思案するような顔をしたすと一氣に不安が押し寄せた。

「……でもお、よく考えたら今日はまだいいよね」

「な、何で？」

「だってめぐるちゃんも帰ってからその体でじっくりオニーとかしたいだろうし」

「な、なんてこと言うんだよ！　そ、そ、そんなのしないよ！」

「えっ！？　女の子の体フリータイムでさわり放題いじり放題なのに！？」

「なにそのすっごい驚きようは！　……大体今はとてもそんな気分になれないよ」

「あつ、そっか。今は二次元のおじいさんにしか興味ないんだっけ。残念だね」

「うっ……」

がくんとうなだれる巡。

だがそのおかげでいつもは女の子とはロクに話もできない巡が、メルや花奈とある程度渡り合えているのも事実である。

「じゃあそれはいいとして、お兄ちゃんにお願いしに行つて、すぐ男の子に戻るかどうかはわからないんだけど」

「うん」

「どのみち戻る前に両親の同意が必要なの」

「え？　なんで？」

「それは未成年なんだから当然でしょ？」

「女にする時は問答無用だったよね！？　なんで今度はそういう手続きがいるの！？」

「きゃっ、めぐるちゃんスルドイっ！　抱いて！」

「なにごまかそうとしてるんだよ！ 誰だっておかしいと思うよ！」
「ごまかさないで抱いて！」

「うるさいよ、声がおっきい！……言っとくけど家には父さんしかいないよ？ 母さんはでていつちゃったから」

「ふん。じゃあそれでもいいよ」

「じゃあつてなにさ……。さつき両親って言つてたけど本当に大丈夫なの……？」

「さっそく行こつか。早く早く」

疑問の声を無視し支度を済ませたメルは、巡の腕を引っ張り促す。早々に教室をあとにしようとする二人に、やはり横槍が入った。

「ちよつとメル、抜け駆けは許さないわよ？」

隣でにらみを利かせる花奈。
気後れすることなくメルは言い返す。

「クリちゃんはめぐるちゃんとずっと一緒だったかもしれないけど、わたしは今日初めて会ったんだよ？ いいでしょこれぐらい」

「といつても半年ぐらいよ？ それに異性を意識したのは私だって今日が初めてなのだし」

「異性じゃないよ！？ 同性だよ！？」巡が声を上げたが歯牙にもかけない。

「美道、あんたも何か言つてやりなさいよ」

そう言つて花奈は前の席の美道に振る。

彼はなにやら熱心にメールを打っていた。名前を呼ばれると体だけ横に向けて、なおも目線の先は携帯。

「なんだい、ボクは今忙しいんだ……。いいじゃないか別に。ボク

はその気になれば巡の家にはいつでも行けるしな。場所だって知ってる」

「……なんで知ってるの？ 来たことないし教えた事もないよね？」
「友達の家ぐらい知っておかしくはないだろう？」

「……僕美道さんの携帯番号すら知らないんだけど」

「ボクは巡の番号とアドレスも知ってるぞ」

「だからなんで知ってるの！」

「なぜ？ ……知らない方がいいことも世の中にはあるんだ巡」

「そうだとっても、こんな身近に謎をかかえたくないよ……」

また一層げんなりしたところで、花奈が呆れたように言う。

「まあいいわ。残念だけど私もそんなヒマじゃないからどの道今日はお別れだし。巡ちゃん、押し倒されそうになったら大声で人を呼ぶのよ」

「うん、それはもちろん」

「いくら集まろうが魔法で返り討ちにしちゃうけどねっ」

「怖いよ！ 朗らかに言わないで！」

「うそうそ。ジョーダンだよ」

巡はふと学校を灰にしようとした朝のメルを思い出し、身をすくませた。

「……いや、あれもきつと冗談だったんだよ。途中まで呪文唱えかけてたけど。」

今度も冗談だといいなあ……。

メルちゃんのお宅訪問 1

結局巡はメルを自宅に連れて行くことになった。

両親の同意を得るためというかなり怪しいメルの言い分だったが、それでも従ってしまうぐらいに巡は追い詰められていた。

自宅へはまず学校から歩いて駅へ。

三駅ほど電車で揺られたのちさらに徒歩十五分程度という道のり。途中バスを使うこともできるが節約のため基本的には乗らない。巡が高校に通いだしてそろそろ半年。

中学時代よりずいぶん長くなった通学時間にもさすがに慣れてきたが、今回ほど家までの距離を長く感じたことはなかった。

学校を出て電車にも乗らないうちに「疲れたあゝ、もう歩けない。休憩しよつ?」「ご休憩五千円だよほら!」などと大声で口走るメルに神経を削らされる。

他人のフリで先を急ぐも、逃がさんとばかりに腕にしがみついて胸を押し付けては、周囲にわざとらしい恋人アピールをかかせない。道中携帯を盗られて勝手にアドレスを登録させられたり、夏も終わりだというのに突然「そうだ、めぐるちゃん水着買わなくちゃ」「だとか言い出したり、否定すれば「あ、めぐるちゃんのブラ買わないと。でもめぐるちゃん貧乳だからしなくてもいいか。むしろないほうがいいよね」とセクハラ発言を繰り返したりで、巡は早くもうんざりしていた。

電車に乗ってから、ガラガラの車内にがっかりするメルによって満員電車の妄想を垂れ流されたりで休む間もなかった。

はたから見ればはつとするような美男美女カップルなのだが、本当は美少女カップルだが、明らかに男子生徒のほうは腰が引けていた。

それはどこがおかしな光景ではあったが、細かい事情を通りすがりの人々が知る由もなく。

やっとのことで自宅　　といつても賃貸マンション　　に到着する頃には巡の体はふらふらになっていた。

かたやさんざん疲れただのわめいていたメル足の取りは軽い。しかしマンションが見え始めたぐらいから急に口数が減っておとなしくなった。

階段を登り三階の部屋の前まで来ると、

「なんか緊張するね」

そんなガラにもないセリフを口にした。

メル of 妙な態度を勘繰りつつも、鍵を開けて自宅に入る。

われ先にと上がりこまれるかと思ったが、メルはおとなしく立ち止まったままだった。

そのまま扉を閉めてしまいたい衝動にかられたが、魔法でぶち壊されたらたまらないので声をかける。

「……メルちゃん、どうしたの？　上がらないの？」

「あ、うん。……めぐるちゃんの家、誰もいないの？」

「いや、たぶん父さんがいると思うけど……」

それを聞いたメル of 表情が、さらに引き締まったように感じた。

さすがの巡も彼女の様子がどこかおかしい事に気づく。

さっきからなんだろう？　誰もいなかったら襲い掛かる魂胆だったのだろうか。もしくは父さんを瞬殺して……。

にしてもそんな殺気は感じない。どちらかというと気後れしているような？

……緊張してる？　まさか。あのメルちゃんに限ってそれは……。

巡はそんな事を考えながらメルを招き入れてリビングに進む。
メルはぼつりと「おじゃまします」と言っ たきり無言で後をついてくる。

「巡、帰ったか」

リビングに荷物を下ろしたところで、スーツを着た男性が奥の部屋からのそりと姿を現した。

彼は巡の父、東西駈^{とうさいかける}。三十六歳。

一見ひよろりと背が高くきりつとした目元が印象的な優男だ。だが伸び放題の無精ひげとボサボサの髪の毛が著しくマイナスになっ てしまっている。

その上身に着けたスーツは上着がところどころ汚れていて、シャツはしわだらけ、ネクタイはよれよれで変な縛り方。

不調なのか栄養不足なのかやや体の血色が悪い。フォーマルな服装をしているくせにやたら小汚かった。

「うん？ そっちの子は？」

「あ、この子は今日転校してきた……」

「巡、どこにそんな金があっ たんだ？ 父さん今日だってカップ麺を一人さみしくすすっていたというのに」

「違うよ！ 別にお金でどうこうしたってわけじゃないよ！」

駈はなおも疑いのまなざしを向けてくる。

巡が女の子を家に連れてくることなんて今まで一度もなかったため、そんな態度になるのも無理からぬ事だった。

「あ、あの。お邪魔しています。は、はじめまして、わたし潮見夢

留っていいいます」

珍しくおどおどしながら自己紹介をするメル。

いつもの調子で「メルちゃんであーっす！」とかやるかと思ったけど、意外や意外。

そうか。なんだかんだいって男の子の家に来るってことで緊張してたんだな。その上親にもあいさつするわけだし。

メルちゃんもやっぱり普通の女の子っぽいところあるんだな。などと巡が思ったのもつかの間。

メルは意を決したように駈を見上げると、

「お父さん、めぐるちゃんをわたしに下さい！」

「ちよつと待った！」

いきなりお父さんへのご挨拶を始めた。完全に不意をつかれた一撃だったが、巡は素晴らしい速さで反応した。

「お願いだから脈絡なく求婚しないでくれる！？ 自分でもとっさにつっこめてビックリしたけどやっぱり僕、心の奥ではメルちゃんのこと疑ってた！ やっぱ正解だったよ！」

「ふう、言っちゃった。メルちゃんすっごいときどきしたよ」

「言うだけ言って満足しないですよ！ どうしてくれんのこの変な空気！」

駈は「……ほう」と言ったきり品定めをするようにメルを見つめていたが、にやりとわずかに微笑んだ。

かなり悪い顔だったのを巡は見逃さなかった。

メルちゃんのお宅訪問 2

「巡、こういうのは普通男のお前が言うもんだぞ？」

「いやこれは違うよ、全然、ただの冗談だから！」

「めぐるちゃんをどうかわたしにつー！」

「メルちゃんうるさい！」

「えーっと夢留ちゃんだったかな。とりあえず俺のことはパパと呼んでくれ」

「はい！ パパ！」

「ふざけないでよ二人とも！」

巡の嫌な予感は的中した。メルを連れてきた事をいまさら後悔しても、すでに後の祭りだ。

やっぱりこうなったか……。

親の同意が必要だっていうんなら別に電話とかでもよかったんじゃない？

それによく考えたらメルちゃんを連れて来る必要性だってなかったような……。

なんてバカなんだ僕は。

……どうせこれもみんな僕の家に来る口実であって、全部ウソなんだろうし。

「おい巡。どんなあくどい手を使ったのか知らんが、お前みたいなお間抜け男を好きになってくれる子なんてそうはいないぞ？ 冗談だとしても今のうちに既成事実を作ってしまうば……」

「大丈夫です！ わたしたちもうやりまくりですから！」

「なに大嘘を高らかに宣言してるんだよ！ さっきまでの態度はなんだったの！？ それにウソだからっていつでももうちょっとオブラートに包もうよ！」

巡はしつこく釘を刺すようにつつこみをいれる。
急に絶好調になったメルが、どんな爆弾発言をするか気が気でないからだ。

「にしてもこんなに可愛い子が……、ん？ ……お前。お前誰だ！？」

自分を見上げる顔に違和感を覚えたのか、駈は巡の顔を凝視した。
巡は実の親に改めてじろじろ見つめられると、気恥ずかしくなつて顔をそむける。

駈はさすがに巡の変化に気が付いたようだ。

「パパ、めぐるちゃんは今日から女の子になったんだよ」

「女？ ……こちらパパをからかうのはよしなさい」

「……と、父さん。本当に、そうなんだ……」

「お前まで何を馬鹿な……」

「ダンナ、この際もう脱がしまいましょう！ そいつが手っ取り早いはずぜ！」

「ちよつとなに言つてんのメルちゃん！」

「むう……、し、仕方ない。わ、悪ふざけに付き合つてやるとするか。……うむ、なぜか緊張する」

駈は巡の制服を脱がせにかかる。近づいてブレザーに手をかけたところで、巡は身をよじつて激しく抵抗した。

いつそう華奢になった体格にはやや大きいサイズの衣服がはだけ、すべすべの白い肌に浮き出る鎖骨と肩が半分露出する。

「わあっ、やめて！ほんとに！」

「脱ーがーせっ！ 脱ーがーせっ！」メルが周りではやし立てる。

「おかしいな……。息子に俺のムスコがかすかに反応している。そして妙に色っぽい」

「ちよつと、気持ち悪いこと言わないでよ！ だから、なんかよくわからない魔法の力でこうなっちゃったんだよ！」

「……魔法？ 魔法だと？ ……………うーん、そうか、なるほど……」

「えっ！ すんなり納得するの！？ 魔法だよ、疑わないの！？」

「うーむ……ついにお前にも話す時がきたか……」

駈は巡から手を放すと、少し考えるようなそぶりをしたのち真顔で話し出した。

「巡。心して聞け。何を隠そうお前の母さんは、その昔魔法少女だったのだ！」

「ええっ！？」

いきなりの衝撃事実に驚きを隠せない巡。

「……この前はキャッツアイだったとか言ってなかった？」

「すまん、あれはウソだ」

「うん、まあ全然信じてなかったから別にいいけど……」

普通なら今度も冗談で流すところだが、巡は現に魔法少女が実在する事を知っている。

すぐ隣で「ちつ、もうちよつとだったのに」と悪態をつく変態が、一般的な魔法少女と呼べる代物なのかはさておき。

「わたし知ってるよ。東西南^{ていなん}。めぐるちゃんのママだよな？」

「えっ？ なんで母さんの名前を……」

「だってすっごい有名人だよ？ 伝説の魔法使い少女。昔お兄ちゃ

んがとっても可愛がってたんだけど、どこその馬の骨に寝取られたって言ってた」

「馬鹿な。南は処女だったぞ」

「お兄ちゃんは今も童貞だからね。南は子供を孕まされて生まされた後、すっかり魔法力をなくしちゃったって悔しがってたよ」

「……まあ事実ではあるが、ずいぶん悪意のある言い方だな……。ちゃんと恋愛して、同意の上だぞ？ ……お兄ちゃんってもしかして道程のことか？ たかむらみちのり 高村道程」

「えーっと……多分そんな名前だったような気がする」

「やっぱりまだ根に持ってるのかあの人は……。それにお兄ちゃんなんて呼ばせてしょうもない」

……自分だってパパとか呼ばせてるくせに。

巡はそう言いたくなかったが、黙って二人の会話に聞き入っていた。全てが初耳であつたが、どちらもうソを言っている様子はない。

こうなってはさすがに信じざるを得なくなってきた。

メルちゃんのお宅訪問 3

メルは巡に向き直り、まっすぐな視線を向けながら言った。

「だからわたしがめぐるちゃんにこうも惹かれたのも、きっと南さんから引き継がれためぐるちゃんの中に眠る魔法の力を感じ取ったからなんだよ」

「魔法の力……」

「……ねえ、覚えてる？ わたしたち二人が出会ったときのこと」「そりゃ覚えてるよ……。今日の朝だしね……。遠い昔を回想するように言わないでよ」

「そう、めぐるちゃんがねつとりとからみつくようないやらしい目つきでわたしのパンツをガン見した時のこと」

「そんな目つきしてないよ！ あれは偶然見えちゃったんだって！」「でもいいのそんなこと。今となってはあの時パンツなんてはいてなければよかったなって思ってるぐらいだから」

「ダメ。ちゃんとはいて。毎日かかさず」

「とにかく、めぐるちゃんを見た瞬間、体に電流が走ったの。オーガズムに達したの」

「一言多いよ……」

「わたしたちが運命的な出会いを果たしたのも、きっと魔法力がお互いをがひきつけたんだよ」

「なんか無理やり美化しようとしてない？」

「それに答案用紙に東西って名前があって、確信したの。珍しい名前だし。そうじゃなければ見ず知らずの人にいきなり呪いなんてかけないよ」

「また呪いって言った！ そうやって正当化しようとして！ 僕、この恨みはたぶん一生忘れないと思う」

「だからめぐるちゃんの体だけが目当てじゃないんだよ？ そう、

これは魔法という名の恋の力に引き寄せられた結果」

「なんかうまいこと言ってるようだけど、体だけがってことはとりあえず体目当てではあるんだね……」

その時、何か考え込むようにしていた駈が口を開いた。

「巡は魔法で女になった。うん、それはわかった。なにせ親の俺から見てもムラムラするぐらいだからな」

「ちよっと！ 気持ち悪いんだけど！」

「そこでだ。その容姿を利用しない手はない。父さん素晴らしいアイデアが浮かんだぞ。つまりその…… AVを作ろうかと思いついたんだが」

「いきなり話が飛躍してるよ！ そんなのどっかよそで勝手にやってよ！」

「そうか、巡、協力してくれるか！」

「なんで僕が！ するわけないでしょ！」

「いやこの際イメージビデオでもいいんだ！ いけるぞお前なら！」

「はい！ わたし、精一杯頑張ります！」

「メルちゃんなにいい返事してるの！」

「監督、提案があります！ わたしとめぐるちゃんが二人で絡み合うというのはどうでしょう！」

「おおっ！ それは願ってもない！ 父さん想像しただけでガツチガチだ！ いやビンビンだ！」

「最悪だよもうほんとに！」

「わたしも想像しただけでおツユが……じゅるっ」

「メルちゃんよだれ！ よだれふいて！」

「めぐるちゃんふいてっ！ ついでに下のお口も！」

「自分でふけ！」

「よし、タイトルは『女ざかりの君たちへ』レズビアンパラダイ

ス」で決まりだな」

「怒られるよ！ 訴えられても知らないよ！？」

「なにを、元は俺の精子の分際で生意気な」

その言葉にカチンときた巡は、駈の弱点を突いて反撃した。

「父さん！ くだらないことばかり言っていないで、さっさとまともな仕事についてよ！」

いま、というかここ三年ほど駈は無職だった。

自営業だ、仕事 중이다、と言い張ってはこうして家でもスーツを着ている。

フラツといなくなつては何日も帰らなかったり、家にいると思えばたいていパソコンに向かつてネットかゲームばかりしているだけだ。

本人いわく金を稼ぐための情報収集だそうだ。

この前はうさんくさい栄養剤の販売に手を染めていたようだが、さっぱり売れず今も押入れに在庫が残っている。

もう飽きたらしい。

というかただのマルチだった。

「案ずるな巡。いま俺はバーチャルな空間でコミュニティを結成し、リーダーとして次々とプロジェクトを立ち上げてはハードなスケジュールをこなしているんだ」

「それネットゲームの話じゃん！ 横文字でごまかしても無駄だよ！ 最初にバーチャルって言っちゃってるし！」

「だが父さんウソは言っていないぞ。もうウソはこりごりだからな」

数年前駈は会社をクビになったにもかかわらず、半年ほどエア出勤を繰り返していた。

だがある日漫画喫茶から出てくるところを南の知人に目撃され、ついにそれは発覚した。

そしてその夜、容赦ない拷問が行われた。

駈はあらかじめ用意していたウソで巧妙にごまかしていたが、南が本気を出すとすぐに口を割った。

それはもう恐ろしい拷問だったという。二人の寝室には今でも時おり血痕が見つかるそう。

だが翌日から開き直った駈は、とたんに生き生きしだした。

もう朝からビクビクと席のない会社に行くふりをしなくてもよくなったからだ。

駈は就職活動をするふりをしつつ、やっぱりこれからは自営業だといいつつ、その実好き勝手に遊んでいた。

その態度がついに南の逆鱗に触れたのだ。

ほんの一月ほど前、南はなぜか下の子である巡の妹、東西環^{ていせいはん}だけを連れ実家に帰って行ったのだった。

メルちゃんのお宅訪問 4

「父さんがそんなんだから母さんが愛想つかして出て行っただよ？ …… そのうえ環まで」

恨みを込めてそうつぶやく。

そう口にする、巡の中に強い悲しみの感情がこみ上げてきた。

「そうだったな…… すまん巡、父さん悪いと思ってる。だがその話なんだが……」

巡がいつになく悲しそうな表情をしたのを見て取ったのか、駈も真剣な顔になる。

一気に室内がシリアスな雰囲気包まれた。

「たまき？ …… めぐるちゃん誰なのその女」

しかしそんな空気を読めない人物が一人いた。メルだ。
正確にはそんなことお構いなしといったところか。

彼女のギラッと鋭い視線が巡につきささる。そして巡の二の腕にメルの手がメリメリと食い込んだ。

華奢な細腕からは考えられないような握力だった。

「い、痛いって、放してよ！ 環はただの妹だよ！ 四つ下の！」
妹？ …… あやしい」

「いやそこは『なんだ妹かあ』って終わるところでしょ！」

「夢留ちゃん鋭い。巡は環が可愛くて可愛くてしょうがないんだよな」

「い、いやべつに？ そんなこと、な、ないよ？」

うつたえる巡。口では否定をしているものの、隠し事が下手な彼の挙動は明らかに不審だった。

メルは掴んだ腕を放さずさらに追及する。

「だって妹って……。実の妹なんでしょ？」

「そうだよ。ちゃんと血の繋がりがあってあるよ」

「やっぱりあやしい！」

「だからなんで！？ 安心していいところでしょ！？」

「義妹なんて生ぬるいのは認めない！ めぐるちゃんだってそうでしょ！？」

「僕に同意を求めないでよ！ そもそも言ってる意味がわからないし！」

「……ちよつとメルちゃん出かけてくるね。急用ができちゃった」

そう言って巡を解放すると、さっさと部屋を出て行くとする。

「待つて！ この流れでどこに行くつてのさ！？」

「パパあ、たまきちゃんって今どこにいるのかなあ？」

「父さん教えちゃダメ！」

巡は叫んだ。メルの凶行を阻止すべく。

もしメルちゃんに環が狙われたら……。何をされるかわかったもんじゃない！

最悪変わり果てた姿に……。弟として再会するなんてことになるかも！

「うん、その事なんだが……」

「だからダメだって！」

巡の危機迫る表情を不思議そうに見つめて、駈は言いよどむ。

メルは直接聞き出すのをあきらめたのか、座り込んでカーペットの上をじーっと見つめだす。

そして両手と膝をつくと何かを探すように首を振りながらはいずりだした、

その奇妙な行動に、巡は思わず尋ねる。

「な、何してるの？」

「……髪の毛とか落ちてないかな？って。たまきちゃんの」

「お、落ちてないって。もう出て行って結構たつし、この前掃除だつてしたし。……だ、だいたいそんなの見つけてどうするの？」

「もちろんあらゆる魔法を駆使して髪の毛から居場所を突き止めるんだよ？ もう全魔法力をつぎ込むんだから」

「そんなことに全魔法力つぎ込まないでよ！ それに居場所を知つてどうするつもり！？」

メルはその質問には答えず、無言で搜索を続ける。

そんな姿に軽く恐怖を覚えた巡は、それ以上声をかける事をためらった。

一方駈はいつの間にか用意したカメラで、彼もまた無言のままメルのおしりを追っていた。

室内は二人がごそごそと動き回る音だけ。全員が沈黙のまま異様な光景が続いた。

やがて一通り徘徊し終わったメルが立ち上がり、額を拭うしぐさをする。

「ふー、やっぱりないなあ。でもめぐるちゃんの陰毛らしき物を発見しちゃった。リビングでオ ニーするなんて開放的なんだからもう」

「えっ？ ぼ、僕、ここでなんてしないよ！」

「じゃあいつもどこでしてるのかなあ？」

「ど、どうでもいいでしょそんなの！」

「最近はおっぱりビンゲだな」

「ちよつと勘弁してよ父さん！」

堂々と盗撮行為を働いていた駄が胸を張って言った。

と、その時何かを思いついたようにメルが声を上げる。

「あ、そうだ！ めぐるちゃん、たまきちゃんのはいたパンツとか隠し持つてるでしょ？ 出して」

「持つてないよ！ なにその当然持つてるみたいな言い方！」

「なに？ 見せてみる巡。父さんが鑑定してやろう」

「だから持つてないって！ ていうか鑑定できるの！？ すごい職人芸！」

「めぐるちゃん、どこに隠してるの？ 早く出して。……あ、そっか。今はいてるんだよね？」

「そんなわけないでしょ！ そんなに僕を変態に仕立てあげたいの！？」

「ゴチャゴチャ言つてないでさっさと脱いで！ ほら！」

巡の下半身にかじりつくメル。

あきらかにズボンもろともパンツまでずり下ろそうとする怪力に、必死で抵抗する巡。

駄はその様子を再び構えたカメラに収めていた。

「ちよ、ちよつと、やめてつてば！ ……父さん！ なに撮ってるの！ 助けてよ！」

「レスビアン男装逆レプ……。こいつは前衛的すぎるぜ……。新時代の幕開けだ！」

「バカなこと言つてないで早く助けて！ メ、メルちゃん、もうト

ランクス見えてるでしょ！ 女物のパンツなんてはいてないって！
「監督！ こんな感じですか？ わ、わたしこんなことした経験ないから、ちゃんとできてるか不安ですっ」

「自信なさそうだけどすごい上手だよメルちゃん！ 今朝も似たようなことしたよね！？ すっごい慣れた手つきだったけど！？」

「うんうん、いい感じだぞ夢留ちゃん。レズというかもはや痴女っぽい」

「やったあ、ほめられちゃった！ めぐるちゃんもほら、もっと對抗心を燃やして……」

「そんなのに乗っかるわけないでしょ！ そりゃメルちゃんにとっては褒め言葉かもしれないけど！ ていうか、なんでこんな流れに……」

巡は脱がされまいとふんばりながら、そう呻いた。

だが彼の奮闘むなく、さらに力強くなったメルの腕力にずるずるとズボンが下ろされていく。

いままさに巡の貞操は絶体絶命の危機に瀕していた。

メルちゃんのお宅訪問 5

「メ、メルちゃん！ほんとにやめて！しゃれにならないって！」
「めぐるちゃんものってきたね！でももう嫌がる演技はこのぐらいいいから次に行こ？」

「演技じゃないって！それに次ってなにさ！？」

メルの方がいつそう強く込められ、ついに巡の腕力も限界が近づき陥落寸前になる。

止まらない暴走に、巡は心からこれ以上ない危機を感じた。

……こ、こんな、これを脱がされたら一体どんな事に……。
どうにか、どうにかしないと！

なんとかしてメルを引き剥がさないと、と巡が強く念じたその瞬間。

腰元にまとわりついていた変態女は、なにかに強烈な衝撃を受けたように吹っ飛ばされた。

そしてゴズッ！とテーブルの角にメルの後頭部が直撃するにぶい音が響いた。

「……え？」

何が起きたのかわからず啞然とする巡。カメラをまわしていた駈も同様だった。

当然メルが自分から後方へジャンプしてテーブルに後頭部で頭突きをかますなどという意味不明な行動に出たわけではない。

不自然に吹き飛んだメルを見て、二人は彼女がなにか目に見えない力によってそうなったのだと思わざるを得なかった。

「う、うん……」

メルが後頭部をさすりながら上半身を起こす。

「……メルちゃん、だ、大丈夫？ さっきものすごい音がしたけど」

「あれ、わたし……。そっか、夢だったんだ」

「なにが？」

「めぐるちゃんとエッチなビデオを撮影するっていう」

「夢じゃないよ！ 無理やり襲い掛かってきたでしょ！」

「めぐるちゃんが激しく求めてきて、わたしちよっと困っちゃって」

「ごめんやつぱそれ夢だよ」

「そしたら大型トラックが横からつつこんできて」

「どこでなにやってたのそれ！？ 明らかに野外だよね！？」

「全裸のめぐるちゃんをわたしがばって、それで……」

「かばわなくてよかったよ。路上で全裸のやつなんていつそひき殺されたらいいんだ」

「あ、わたしも全裸だったんだけど」

「トラックの運転手さんいい仕事した！」

「わたしすごい衝撃で跳ね飛ばされたんだけど……めぐるちゃん無事だったんだね。よかった。……じゃあつづき、しよっか」

「しないよ！ だからそれは夢だって！ 恐ろしい悪夢だよほんとに！」

なんらかの衝撃で跳ね飛ばされ後頭部をしたたかに打ったはずのメルだが、何事もなかったかのようにすくと立ち上がった。

さすがに駭が驚いて声をかける。

「夢留ちゃん、大丈夫なのかい？ いちおう病院行ったほうがいい。」

なんか知らんがすごいふっ飛び方だったぞ」

「全然だいじょうぶだよ。メルちゃんこう見えて頑丈だから」

「いや、メルちゃん、やっぱり診てもらったほうがいいよ。他にもいろいろと」

「なんか言った？」

「いえ」

あれだけのダメージをうけてけるっとしているメルに戦慄を覚えつつも、巡は首をひねった。

「にしてもさっきのはなんだったんだろっ……」

「なになに？ どうしたの？」

「いや、僕の服を脱がそうとしていたメルちゃんがいきなり吹き飛ばされて」

「……あ、なるほど。さっきの衝撃はきっと魔法だね。うわべは脱がされたくない力と本当は脱がされたくて仕方ない力の相互作用で、めぐるちゃんの魔法力が爆発したんだよ！」

「そうやってもっともらしくウソ言わないでくれる！？」

どうやらメルをどうにかしたいと巡が強く念じた時、魔法によって衝撃波のようなものが発生したようだ。

巡は自分で魔法を使ったという実感がなかったため半信半疑だったが、それ以外に説明がつかなかった。

受けたメル本人が言うのだから間違いない。

駈は「なあんだ魔法か。ならそう驚く事はないな」と余裕をかましていた。

彼は昔、妻である南が起こす魔法を目の当たりにしていたのであるっ、理解も早かった。

結局魔法を使った巡本人が一番腑に落ちない状態だった。

「……なんかもう今日は疲れたよ。メルちゃん、当初の目的は果たしたでしょ？ お願いだからもう帰ってよ」

「えっ、当初の目的は親の同意をもらう事でしょ？」

「メルちゃん別の同意をもらおうとしたでしょ……。あと男に戻るのに同意が必要とかウソでしょどうせ」

「あっ、バレてた？ やだめぐるちゃんったら、そうと知りつつ泳がせてたの？」

悪びれずにそう言うメルにあきれ顔の巡。
そんな顔に駈が真面目な口調で語りだす。

「ところで巡。母さんと環のことなんだが、この際だから本当の事を言おうと思う」

ああ、次は一体なんなんだろう、と今度はうんざりした顔で巡は駈を見上げた。

メルちゃんのお宅訪問 6

「実はな……母さんは環を連れて出て行ったのには別の理由がある」
「えっ！ 働かなくてお金がなくなつて家賃もきつくなつてご飯も満足に食べられないというのにやつぱり何かわけのわからないことばかりしてる父さんにいい加減嫌気がさして出て行ったんじゃないの？」

「お、おう。早口でいっぱい言ってくれたがそれは違うんだ」

「じゃあなに？」

「お前には内緒だったんだが、実は環を国際魔法研究専門学校お兄ちゃんだいき科に入学させるため、別居を余儀なくされたのだ」

「なにその怪しい学校！ 絶対勉強とかするところじゃないでしょ！ どの風俗！？」

「バカ、落ち着け。……いいか、ここは南もその普通っていた由緒あるれつきとした教育機関だ」

「ほんとに？ ……ていうか母さんそんなところ行つてたの？ 初耳なんだけど」

真面目な話になるかと思いきや案外そうでもなさそうな雰囲気になったところで、メルが横から口を挟む。

「めぐるちゃん、何を隠そうわたしも国際魔法研究専門学校お兄ちゃんだいき科、通称まほ学の卒業生なんだよ」

「えっ！？」

「そこで、どのぐらいだったかなあ、三年ぐらい通ったかなあ？」

「魔法学校って言つてたの、そのことだったのか」

「ほら見る巡。夢留ちゃんも通つてたのはビックリだが、これで安心したろ」

「逆にめちゃくちゃ不安になったんだけど……」

「その時一緒にクリちゃんだったっていたしね」

「ああ、御厨さんね。……さらに不安が」

メルたちはそこで知り合ったと花奈が言っていた。あやしいが実在する学校である事は間違いないのだろう。

しかし巡は変態を輩出するような学校へ妹を預ける事にかなり抵抗を感じていた。

それにどうにもおかしい点がいくつもある。

「父さん、ちよつと待って？　なら別居しなくたってここからその学校に通えばいいじゃん」

「ああ、学校は全寮制らしいぞ」

「なら母さんは？」

「ああ、うん」

「……『ああ、うん』じゃないよ！　やっぱり出て行っただんじやないか！」

「子供には複雑な事情はわかるまい」

「どうせさつき僕が言ったとおりの事情でしょうが」

「いや、他にも隠していた借金が見つかったとかいろいろあるんだ」

「ええ！？　なにそれ！？　いくら！？」

「まあまあ落ち着け」

いきり立つ巡をなだめる駈。

掴みかかるとは行かないまでも、日ごろから節約を強いられている巡には衝撃の事実だった。

それでも樂觀的な父親に怒りを通り越してしまった巡は、氣力を失いつつも残る疑問を口にした。

「……大体そこに環が入学する事に何の意味があるのかさっぱりわからないんだけど」

「まあ聞いて驚け。試験にパスして入学が決まればお祝い金として、一千万ももらえるそうだ」

「なんでもらえるの！？ 払うんじゃない？ やっぱり金だよ！ なんか身売りみたくなってるじゃん！」

「わたしの時ももらったみたいだけど、ママがお金管理してるからよく知らないなあ」

「ほ、ほんとに！？」

「卒業の時には三億ぐらいもらったらしいけど」

「額でかつ！ メルちゃんもしかしてその代償としてそんな風に……」

「え？ どんな風に？ わたしそんなに変わってないと思うけど」

あつ、と巡は口をつぐむ。

……そうか、生まれつきかわいそうな子だったんだな。

いや、それ上さらに拍車がかかったのかもしれない。

「やっぱり怪しすぎる……。心配だ」

「最初は父さんも反対したんだがな、『なら働いて金入れなさいよこのクズ！』と罵られてしまい泣く泣く従ったのだ」

「……普通に働けばいいんじゃないの？ ていうか働け」

「だがもう遅い。もうきつと入学も決まっているはずだ。なんの音沙汰もないが。泣き付いてどうにか九・一で一千万を分ける約束をしたのに」

「情けないなあ……。それも絶対無視されてるんだよ」

「だがお前にも連絡ないだろ」

「……でも僕には秘密だったんでしょ？」

「なあ、もし母さんから連絡きてお前に直接金を渡すようだったら、きちんと父さんに報告するんだぞ」

母が出て行った後、実は巡の携帯には幾度となく連絡があった。

そのうち父には内緒で少しばかり生活費をもらう予定だったが、魔法学校うんぬんは一言も聞かされてなかったので隠すつもりだったのだろう。

どちらにせよ駄のためにここはお金を渡さない方がいいと考えた巡は、そのことは黙っておく事にした。

メルちゃんのお宅訪問 7

「さあて、たまきちゃんの居所もわかったし、わたしはこのへんで」

つまらなさそうに話を聞いていたメルが、そう言っでさっさと出て行こうとする。

しかし巡はターミネーターをこのまま行かせまいと後ろから腕を掴んだ。

「待った。……それで環をどうするつもり？」

「ふふ。やだなあ、そんな、妹と認識できないぐらい顔を変形させるとかやらないよ」

「当たり前だよ！ そういう発想ができる事自体危険すぎ！」

「ちよつと顔を確認するだけだよ。わたしにとっても妹になるわけだから」

「いやならないでしょー！」

「え？ なるよね？」

「真顔で聞き返さないでよ！ ……じゃあさ、僕もその学校連れてつてくれないかな。お兄ちゃんって人もそこにいるんでしょ？」

「べつにいいけど、お兄ちゃんに会ったとこで何するの？」

「だから！ その人に僕が男に帰れるよう頼むって話だったでしょー！」

「あつ、そつかあゝ、わっすれてたあゝ。ごめゝん」

「今とぼけようとしてたよね……」

言動がおぼつかないメルをたしなめると、なんだかんだで結局これから魔法学校へ向かう事になった。

なんだか面白そうだと駆も行く気になっていたが、ウザいし一緒にいるところを外で見られたくないのでスルーし巡とメルはマンシ

ヨンを出た。

路上に出た二人を沈みかけの夕日が照らす。
帰りが遅くなると夜になってしまふなと思ったところで、どうやって行くのか、そもそもその学校がどこにあるのか全く知らないことに気づいた。

「メルちゃん。ところでなにで行くの？ 場所どのへん？ 僕お金ないからタクシーとかは……」

「心配ご無用。あつという間に着くよ」

巡の質問をさえぎってメルは自信満々に言う。

彼女はいつの間にか自分の背丈よりやや短めの棒状のもの、例えて言うならトイレの詰まりをスッポンスッポンやって解消する時に使うアレのようなものを手にしていた。

結構な長さだが、メルは手なれた様子で扱う。

銀色に光沢を放つそれは、妙に高級感が漂っていた。

「……えーと、なに、それ」

「これ？ ホウキのリリちゃんだよ？」

「……ホウキ？ その大きな吸盤みたいな先端、どう見てもはき掃除できないよね？ それになんかかわいい名前つけてるみたいだけどうすごい鉄っぽくて無機質なんだけど」

「まえはちゃんとした竹ボウキだったんだけど、ちよつと激しい使い方したらボキッていつちゃって。頑丈に改造してもらったの」

「一体どんな使い方したの……？」

「え？ それは……やだ、恥ずかしい」

そう言ってお茶を濁すとメルはリリちゃんとやらにまたがる。

わざとらしく足を上げてパンチラし、巡の反応をうかがうのも忘れない。

「ほら、めぐるちゃんも早くうしろにまたがつて」

「……ねえ、まさかそれで空を飛んでいくって言うつもり？」

「そうだよ？」

「ほ、本当にそれ飛ぶの？　なんか頼りないし、風圧とかで振り落とされそうな予感がするんだけど」

「大丈夫だよ。抵抗調整に重力制御機能だってあるし。いちおう魔法でもカバーするし」

「よくわからないけど大丈夫なのかな……。怖いなあ」

いまいちメルを信用しきれていない巡は不安を隠せない。

だがいかがわしい物体にまたがつていかがわしい事をしようとしている姿を通行人に見られたら嫌なので、仕方なく言うとおりにすることにした。

おそろおそろメルの後ろのスペースにまたがる。

「……なんかこの棒とところどころ突起があるんだけどこれ何？」

「じゃあいつくよー！　リリちゃんゴー！」

投げかけられた疑問を無視し合図をかけるメル。

その瞬間、ふわりと体が持ち上がり二人の体が宙に浮いた。

「おわっ、すごい！　ホントに浮いてるよ！」

「えへへっ、すごいでしょ！　でもリリちゃんの力はこんなもんじゃないんだから」

メルがそういった途端、ホウキが小刻みに震えだした。ブルブルと体と棒の接着部分が振動する。

「ち、ち、ちよっとストップ！　な、なにこれ！」

「何ってバイブレーション機能だよ？ 突起をうまく使ってね……あんっ」

「止めて止めて！ ダメだってこれ！ ああっ」

「恥ずかしがらないで声だしていいよ？ ほら！ ちょっと乱暴にしても今度はそう簡単に折れたりしないから！」

「こ、これのせいで折ったの！？ …… ってもういいから！ 早く、ストップ！」

何度も大声で催促することやつと振動は止まった。

ホウキ全体をパワーオフにしたようで、二人とも浮き上がる力を失いゆつくりと地に足が着く。

後ろを振り返りながらメルが残念そうに言う。

「もう、これが一番すごい機能なのに……。めぐるちゃんには刺激が強すぎたかな？」

「いっつもこんなの乗ってるの……？」

「つまりそれってわたしにオ ニーの頻度を聞いてるってこと？ めぐるちゃんいやらしい」

「…… どうでもいいけどさ、こんなの乗ってたら公然わいせつとかそんなんにひっかかりそうじゃない？ それに未確認飛行物体だとかなんとかで騒がれるんじゃないの？」

「大丈夫。ステルス機能付きだから、飛んでる時とか一般の人には見えないよ」

「そっちの方がバイブレーション機能より絶対すごいよね……」

「そんなことないよ、だって強弱調整できるんだよ？ あとすごいのがオート機能って……」

「もういいから早く行こう！」

「早くイキたいの？ じゃあフルパワーで」

「バイブはもういいから！」

再びホウキが浮き上がり、今度は振動することなく一気に高度を上げた。

お兄ちゃんは大魔法使い？ 1

数分後。

異常なまでの猛スピードで上空を駆け抜けたホウキは、初めてのフライトに感動する間もなくあっという間に二人を目的地へ運んでいた。

メルが振動のないホウキにダラダラ乗っていても仕方ないといって、フルパワーでとばしたせいだった。

「とうちゃーく！」

繁華街から少し外れたとある一角に二人は降り立った。

周囲に人の通りがそれなりにあったが、ステルス機能とやらが効いているのだろうか、誰も空から降りてきた巡達に驚いているものはいなかった。

目前にはややさびれた雑居ビル。学校の姿など影も形もない。

またもや気が付くとホウキをどこかにしまっていたメルは、不思議がる巡を尻目に意気揚々とビルに入っていく。

たまらず巡はメルを呼び止めた。

「ちょっと、メルちゃん！ 魔法学校は？ このビルに入るの？」

「いいからいいから。ついてきて」

メルはいつもの調子でそう言うが、こんな人がいるのかも怪しい建物にメルと二人で入るのは少し勇気がいった。

何が待ち受けているかわからない、というよりか単にメルがなにをするのかわかったもんじゃないので恐ろしいだけだが。

……まさかここでいかがわしいことをするつもりじゃ……？

だが例え罷だろうとメルに従わないことには話が進まない。他に自分が元に戻るアテがあるわけではないのだ。

巡は警戒しながらメルの後についていった。エレベーターで三階まで上がる。

一階や二階は何かの事務所になっているようで、途中普通に人の姿が見えて少し安心した。

三階はドアが一つあるだけで他は白塗りの壁。この階は不思議に静かだった。

ドアの前でメルが立ち止まると、すぐ横についているインターホンにむかって声を発した。

「お兄ちゃんただいま。メルちゃんだよっ」

そしてドアノブに手をかける。

「い、今の何？」

「合言葉だよ。あと声紋認識。ほら、いよいよお待ちかね」

メルは巡の手を強く握ると、もう片方の手でドアを押し開けた。

一瞬見えた室内は真っ白な空間だったが、すぐに手を引かれそこに飛び込む。

すると視界が全て白に包まれた。

「いやあ〜おひさだよね〜。メルちゃん」

ニコニコと微笑むのはいかにも人の良さそうな男性。

年のころは三十後半ぐらいか。つやつやと血色のよい肌に、愛嬌

ある丸々とした瞳が特徴的だ。

やや小太りな体に、こぎれいな服を身に着けている。

彼こそがお兄ちゃんこと高村道程たかむらみちのりその人らしい。

ここは道程の事務所兼自室。ゆうに巡の家族用マンションの二倍はありそうな間取りだ。

あのドアを開けた途端一気にこの高級スイートルームの一室のよ
うな場所にワープしたのだ。

豪華な絨毯が敷き詰められ、見るからに高そうな調度品が並ぶ。
さきほどまでの巡の家とは別世界の空間。

だが天井や壁にとこどころ貼られているアイドルやアニメのポ
スター、皿や壺などの装飾品に紛れて置いてある美少女フィギュア
などがいろいろ台無しにしていた。

巡とメル、道程の三人は机をはさんでお互いソファにこしかけて
いる。

光沢を放つ高級そうな長机の上で、三つのティーカップが湯気を
立てていた。

ついさっきこの小型の中年男性がちよこまかと動き回り用意した
ものだ。

「いやいや、ほんと久しぶり」

「……久しぶりだね」

「メルちゃん卒業した途端にぶつつりメールこなくなっちゃったけ
ど」

「うん、なんか急にめんどくさくなって」

「……え？ め、めんどう？」

「そ。だっってお兄ちゃんなんてわたしの生活の中でいっぱいいる知
り合いの内の一人に過ぎないじゃない？」

巡は気まずそうにアニメのキャラクターがプリントされたカップ
を口に運ぶ。

「い、いやあ、でもうれしいもんだね。卒業生がこうやって会いに来てくれるって」

「別にお兄ちゃんに会いにきたわけじゃないんだけど？」

「……えっ？」

「……しょ、しょうがないからついでに様子見にきたただけなんだから」

「あ……、そう」

ニコニコだった道程の歓迎ムードが一転、暗い雰囲気包まれる。メルもついさっきまでとは違ってかわり、沈んだ調子で話をあわせるだけ。

巡はどんどんいたたまれない気分になるも、嫌な予感がしたので黙って成り行きを見守った。

しばらく沈黙が続いた後、急にメルが気でも違ったように明るい声を出した。

「なぐんで、ウソだよっ！ ホントはお兄ちゃんのことだいすきだよ！」

「よぉーし。メルちゃんよくできました。はい。おこづかい」

「うわぁーい、お兄ちゃんだいすき！」

道程は懷から札を何枚か取り出し、メルに渡す。

巡はうげっ、と飲み物を吹き出しかけた。

嫌な予感的中し、早くもこの場から消えなくなる。

一瞬ドヤ顔で道程がこちらに視線を向けてきたが、巡は机の上のフィギュアとにらめっこしてどうにか流した。

「あ、そうだ。おいしいケーキあるから今持ってくるね」

上機嫌で道程が席を外した。ふふふん、と謎の鼻歌がキモかった。

すると隣でふっ、とメルが鼻で笑う。

「三万か……ちよろいもんだね」

明らかに小バカにした感じで小さくそうつぶやいたのを巡は聞き逃さなかった。

お兄ちゃんは大魔法使い？ 2

「めぐるちゃん。これで今晚、付き合ってくれるよね？」

メルは今しがた受け取った三万円を巡の手に握らせながら言った。

「嫌だよ！ なにこのわかりやすいお金の流れ！」

「お金……ないんでしょ？ なら受け取って」

「うっ、なんて汚い……。メルちゃん君って人は……。そんなの受け取れないって」

「……ちっ……うふふっ。ジョーダンだよ。そんな人の足元見てお金で買収なんてするわけないでしょ？ でもこのお金はあげる。使ったびにメルちゃんの顔を思い出してくれればいいから」

「ものすごい恩着せようとしてない！？ あとちよつと舌打ちしなかった！？ どっちにしるそんな汚いお金受け取れないよ！」

「……汚いお金は受け取れない、か……。うん、そうだよね……。さすがめぐるちゃん。わたし惚れ直しちゃった」

メルはうふつとうれしそうにはにかむ。

よけい高感度が上がってしまった。選択肢を間違えたようだ。見境なくお金に飛びついておけばよかったと巡は少し後悔した。

その時道程が軽やかな足取りでトレイを運んできた。ケーキが乗った皿をおのおのの手前に差し出す。

ふんふふ〜んと鼻歌が絶好調で、やはり上機嫌だった。

三人分のケーキを用意し終わると道程も着席する。

「さあ、食べて食べて。本当においしいんだから」

だがメルはケーキには手をつけず、代わりに先ほどの三万円を道程に差し出して言った。

「お兄ちゃん。やっぱりこれ返すね」

「……えっ？」

一気に道程からさっきまでのうきうきムードが消えた。

先ほどまでのニコニコ顔が一転、何が起きたかわからないといった表情で固まる。

「ど、ど、どうしたのかな？ お、お兄ちゃんからのおこづかいだよ？ あっ！ も、もしかして少なかった？」

「ううん、違うの」

「えっ？ あっ、えっと……。あっ！ これあれ？ またツン？

二段構え？」

目に見えて狼狽する道程。そんな彼を見て巡は少し哀れみを覚えていた。

「お金じゃ買えないものがあるんだよ。そうでしょ？ めぐるちゃん」

「僕にふらないでよ……。別にそんなに深い意図があったわけじゃないし……」

正直あまりこの二人と絡みたくなかったので、巻き込まれなくなかった巡は適当にお茶を濁す。

「ね。お兄ちゃん、こういうのはよくないよ。すぐにお金でどうこうしようなんて」

「……メルちゃん、偉そうにしてるけどさっきの自分の言動覚えて

る？ 改心が早すぎて逆に怪しいんだけど……」

巡はいまいち信用し切れなかったが、メルは札を差し出したまま動かない。

どうやら意志は固いようだった。

道程は戸惑いながらも仕方なさそうにそれを受け取り、おそろおそろといった様子で疑問を口にした。

「ふ、ふうん。わ、わかったよ。確かに、メルちゃんの言うとおりだ。……そ、それでさ……だ、誰なのかな？ その子は……」

最初から巡の方にはなるべく視線をやらず、意識しないようにしていたようだがそうもいけなくなっただようだ。

「あ、あの僕……」

「東西めぐるちゃんであーっす！ よろしくね！」

いきなりハイテンションでさえぎられた。

巡を紹介された道程はよりいっそう動揺を始めた。

パチパチとまばたきの回数が多くなり、きよろきよろと目線が行ったり来たり。さっき一瞬見せた余裕のドヤ顔はどこへやら。

……どうしたんだろうこの人。そうか、自分のかわいい？ 元教え子が男子を連れてやってきたらこんな感じになるのかな？

「とうざいめぐる……君。メルちゃんとはどういった関係なのかな？」

待っていましたといわんばかりに胸を張るメル。

「なんとわたし達、結婚しました！」

「えええええ！？ うっそおーん！！」
「してないしできないよ！」

つつこみより早くどでかいリアクションをされ一瞬あせったが、
巡は全力で否定した。

「ジョーダンだよ。近々そうなる予定だけどもぐるちゃんにはまだ
時間が必要みたい」

「たぶん永遠に埋まらないと思うよその時間は」

「……はあ、びつくりした。いやいやさすがにそれはないと思った
よ？ メルちゃんがお兄ちゃんに内緒でそんな……ねえ？ ……で、
本当は何者なのかな？」

まだおっかなびつくり、といった様子で道程は再び尋ねた。

「紹介します。セフレのめぐるちゃんです」

「なんとおー！ー！？」

「違います！」

メルのようにもない一言にいちいち大声を出し驚く中年男。

巡は面倒なのではつきり言っておくことにした。

「僕とメルちゃんは今日知り合ったばかりで、それ以上の関係では
ないです」

不満そうな視線を横からジリジリ感じるが、首を固定し受け流す。
道程はうつむいて首をひねりながら、こちらにも聞こえるぐらい
の独り言を始めた。

「なににせよ異常なまでに好意を持つとるのは違う……。今日

知り合った割にはお互いちゃん付けで呼んでるし……。もしかしてほんとにもうデキとるのか？……。くそう、このガキどうしてくれようか……。魔法でイポに……。いやいっそホモに……。大体、ちよつと顔がいいからって……。顔が……。ん？ んん？」

しばらくぶつぶつ言っていたが、何かに気づいたのか巡の顔を凝視しだした。

軽く目が血走ったおっさんに見つめられ、巡はかつてない身の危険を感じる。

「……ね、ねえ、ちよつとき、前髪をこう、よけてみてくんない？ おでこだすみたく」

鬼気迫る表情の道程に逆らうこともできず、巡は言われた通りに従う。

すると、次の瞬間道程が発狂したかのように奇怪な叫び声を上げた、

「あー！ やっぱ、南ちゃんだ！ 似てる！ いや似てるってレベルじゃねえ！ あの頃の南ちゃんそっくりだ！」

今まで以上の大音声に、巡はビクツと身をすくませる。さすがのメルも何事かと目を見張っているようだ。

お兄ちゃんは大魔法使い？ 3

「あ、あれあれ！？　ね、ねえねえ、これどういうこと？　なんで南ちゃんが？　本当に君は何者なのかしら？」

目をごしごしこすって小動物的な動きをするおっさんに少しイラついたが、努めて冷静に答えた。

「あ、あの、多分その……南ちゃんっていうのは僕の母さんです」
「そうそう母さん母さん……ってなんでやねーん！　本人やーん！」

あまりにもひどいノリツツコミにしばらく場が凍りつく。

再びテンションの上がった道程の暴走が続いた。

彼はその昔、南のことをよほど気にかけていたらしく、巡を見て飛び跳ねんばかりの調子で歓喜していた。

そんな中巡とメルは冷めた視線を送りながら、無言で出されたケーキをもくもくと口に運んだ。

「いやー、お兄ちゃんショックで幻覚見たかと思っちゃったよー」

ある程度落ち着いたところで、巡は自分や家族のことと、ここを訪れたいきさつを説明した。

メルによって女にされたこと、自分を男に戻してくれるよう頼みに来たこと。

魔法で無理やりやられた、のくだりを強調したが、その犯人はそ知らぬ顔でケーキをつついていた。

「そうすると君はあの環ちゃんのお兄ちゃんになるわけだ」

「あ！　そうだ、環は入学したんですね？　今どこに……」

「どこにいるのお兄ちゃん！」　メルが割り込んできた。

「え？　もう帰ったでしょ？　あ、別居してるんだっけ」

「ちいっ！　遅かったか！」

「メルちゃんちよつと黙っててくんない？　……あれ？　でも全寮制とかなんとかって……」

「寮？　そんなのないけど……。……でもいいよそれ！　今度考えてみよつと」

父さんまたウソついたな……。

父親に対する不信感がさらにつのった。

「このまえ環ちゃんと一緒に南ちゃんがやってきて驚いたよ。南ちゃんは相変わらず美人だったけど、さすがに年がね……。最高でも十七超えちゃうともう駄目だね……。ちゃんって言っ年でもないしね」

「はあ……」

「にしても……。く、ふふ……。ふ、ふへへっ！　ざ、ざまみるあの男！　南ちゃんに愛想つかれてやんの！」

危ない笑いを発する道程。軽く狂気のようなものを感じた。

過去に駈と道程、南の間に何があったのか巡は知るよしもない。というか知りたくもなかった。

「……どうでもいいですけど、どうしてくれるんですか僕の体は？　おたくの卒業生がこんなことして、許されると思ってるんですか」

慣れていないせいか巡はなぜか保護者代表のような、おかしな口調になっていた。

「うーん、でもしょうがないよね、在学中からメルちゃん十年に一

度出るか出ないかの変態だつて有名だつたし」

「そんなことないよお。五人に一人ぐらいだよ」

「……もうそのくだりはいいです。それにメルちゃん、自分の評価下がってるけどこの短期間に何かあったの？ 前は十人に一人だつたじゃん」

「やつぱりわたしも全然まだまだなあって思い直して」

「自己評価低すぎだよメルちゃん！ もっと自信持つていいよ！ というか五人に一人もいたら社会とかその他もろもろ成り立たないよ！」

確かにメルは今日一日で何人かの変態との出会いを果たした。

それで本人なりに思うところがあつたのだろうが、巡の中でトッブはやはりメルだった。

ダントツで。

「まあそういうわけだからさ、運悪く車にでも轢かれたと思ってあきらめてよ」

「どういうわけですか！ それに車どころか戦車にズタズタにされた気分ですよ！」

そう軽く流され頭にきた巡は、自分の食べかけのケーキを狙っているメルに向かって抗議の声を上げた。

「メルちゃん！ 全然ダメじゃんこのおじさん！ 話が違つよ！」

「ごめーんねっ」

にこつと笑つて可愛く言う。

それがさらに巡の神経を逆撫でした。

滅多に怒る事のない巡も、今回ばかりはさすがに許せんとはかりに怒りをあらわにする。

「ちょっとなんなの二人して！　だいたいお兄ちゃんとかなんとかバカなことばかりかいて、本当に魔法なんか使えるの？　ただのキモイおっさんじゃん！　どうなってるんだよもう！」

その言葉に、道程のつやつや顔がまたまたかげりだす。
今度はぐさりとヤリで心臓を貫かれたような表情になった。

「ご、ごめんね、怒らないで。落ち着いて落ち着いて。うん。その顔で怒られるとお兄ちゃん死にたくなっちゃうから」

さつきとは比べ物にならないほど小さな声でぼそぼそしゃべりだす。

「いや、別に元に戻せない事はないんだけどね、個人的には戻したくないというかなんと言うか」

「え！？　戻るんですか？」

「……て、いうかあゝ、その、さ。もう別に女の子でよくない？」
「いやです」

「もったいないよ？　絶対。女の子で可愛いといろいろ得だし」
「メルちゃんと同じような事言わないで下さい」

そう言われると道程はうーん、とあごに手をあてて黙り込む。必死に何か考えているようだ。

やがて何か思いついたようで、ゆっくりと口を開く。

「あのね、男に戻すということは、要するに魔法の呪いを解くということだよ。悪いところを直す。つまりお医者さんのようなことをするわけだけれども。手術とかつてすごくお金かかるよね？　うん、お兄ちゃんもいちおう魔法でご飯を食べている身だからね。つ

まりね、ただで、というわけにはいかないかな。わかるかな？」

お金と聞いて「えっ」という反応をする巡。

道程の最高にうさんくさい理屈に、それもそうかも、と思ってしまつ間抜けな少女（少年）がいた。

お兄ちゃんは大魔法使い？ 4

「お金、ですか。具体的な金額って……」

「そうだねー、施術にカウンセリング、アフターケア込みでざっとこのぐらいかな」

道程はぴつと指を三本立てる。

「さ、……三百円」

「巡君。お兄ちゃんそういうベタなボケはあまり好きじゃないんだよなあ」

ついさっき凍てつかんばかりのノリツツコミをした道程が呆れ気味に言う。

「三十円か。細かいのあるかな……、おつり出ます？」

「出ないよ。……こういうとき普通金額上げるよね？」

「ってことは三千円……。……ゴクリ」

「いや、ゴクリじゃなくてね」

「……さ、三万円ですか！？ まったくしょうがないですね！ いやあ毎月百回分割払いにしてください！」

「いや三万じゃないし。やっぱり三百円ずつしか払う気ないのね……。……ていうかなんでキレ気味なの？」

「あ、保険証あるから三割で九千でいいんだ、よかった」

「保険とかきかないからね。勝手に安心しないでね」

なんとか値切ろうとする？ 巡にラチが明かないと思ったのか、ついに道程ははっきり金額を口にした。

「特別サービス。お友達価格で端数切捨てばつきり三千万。用意してもらえるかな？」

「さんぜんまん……？ それって月三百円だったらのくらいかります？」

「……君は何世代にも渡って払い続けるつもりなの？ 言っとくけど分割払いは不可。施術は前払いで入金してからね」

「……………それは円で？」

「そうだけど……。何？ どっかわけのわからない通貨で払うつもりだった？」

「そんな……………」

あまりにも法外な金額にがくつと意識を失いかける巡。

日々の暮らしにも事欠いているような彼の家に、当然そんな大金があるはずもなかった。

衝撃の宣告でお通夜ムードになりかけた時、先ほどから一言も発せず巡の食べかけをおいしくいただいていたメルが口を開いた。

「あれ？ お兄ちゃん、授業でやったときとかそんなのパツパと直してくれたよね？」

「えっ？ どういうことですかそれは」

「そ、それはね。お兄ちゃんの大切な『妹』たちだからね、うん、タダなんだよ」

「じゃあお兄ちゃん、メルをお願い。めぐるちゃんを元に戻してあげて」

「い、いくらメルちゃんの頼みといえどこれは……………」

「えっ、そんな……。わたしお兄ちゃんのこと嫌いになっちゃうかも……………」

「い、いやほら、それはあれだよ、ほらメルちゃん！」

道程は慌てふためきつつ、手でなにかのジェスチャーをした。

そしてメルが道程と視線を合わせること数秒。

彼女は急におとなしくなり、

「……うん。わかった。今日はもう帰る。たまきちゃんはいないしめぐるちゃんとは明日会えるし」

そう言ってゆつくりとソファーから立ち上がった。

メルの不気味なまでの変わり身を見て巡は追及する。

「……ちよつと、なんですか今のサイン」

「えっ！？ い、いやあれだよほら、メルちゃん、次はカーブ行くよ！」

「そんなのでごまかされないよ！ なんなんですか！？」

「じゃあねめぐるちゃん。夜電話するねっ」

巡の問いかけに答えることもなく、メルは笑顔とともにそういい残しドアから出て行った。

メルにしては引き際があっさりしすぎていたので、巡は余計に疑心を抱いた。

道程は自分にはメルのあいさつがなくて弱冠へこんでいた風だったが、仕切りなおすようにして話を切り出した。

「……ふう、邪魔者はいなくなっただしこれでゆつくりお話ができるね」

「ものすごく不自然な去り際だったんですけど一体何が……。……。あの、どっちにしろ僕にはそんな大金絶対に払えないです。ただでさえ貧乏なのに……」

「うん、実はそれは知ってる。環ちゃんが入学のね、面接に来たときに聞いたから」

「それ、知っててわざと……」

「だからね、そんな巡君に今ぴったりのお仕事があるんだよ」
「……なんですか仕事って」

道程は「うーんとね……」と少し言いにくそうにしている。
何を言い出すのか、巡は嫌な予感しかしなかった。

「実はさ。卒業した女の子達、魔法使いすぎて目立つなって言ってるのにやりたい放題だから困ってるの。もちろん野放しにはしてないよ？ 監視役をつけたりして様子見たりしてるし。でも最近人手不足で、その監視役が足りないんだよね。だから巡君にその手伝いをして欲しいなあ、なんて」

「……教育がなってないですね。それは道程さん自身が責任持つてやるべきなんじゃないですか？」

「お兄ちゃんはね、忙しいの。いろいろ運営したり商売したり授業したり盗撮したり。それにお兄ちゃんが直接叱ったりとかさ、ほらあんまり印象よくないし、角が立つしね」

「……はあ。でもそれをなんで僕に？ だいたい僕なんかにできます？」

「面接に来た環ちゃんもそうだったんだけどね。やつぱ南ちゃんのお血筋かな、すごいよ君たち。ちよつと見ただけでもメルちゃん並の資質を感じる。きつと優秀な魔法使いになれるよ」

魔法……。ついさっきも家でメルちゃんを吹き飛ばしたあれのことかな……？

でも全然無意識だったしなあ……。それになんかどんどん話がかしな方向へ向かっている気がする……。

当初の予定と大きく変わりそうな流れに巡は戸惑いを禁じえなかった。

お兄ちゃんは大魔法使い？ 5

「あの……そもそも魔法ってどうやって使えるようになるんですか？」

いまいち実感の沸かない巡は、当然の疑問を發した。目の前にいる中年男性はどうにも怪しい。

「うん、細かい原理とかは置いとくとして、美少女である事が大前提だね」

「それ自分がペテン師って告白してないですか？」

「え？ ああ、お兄ちゃんは別格だよ。そもそもお兄ちゃんが魔法に目覚めたのは、忘れもしない童貞のまま三十歳を迎えたあの日……」

「三十って……、今いったいくつなんですか！ 母さんが今三十五だからどう考えても五十オーバー……？ いい年こいてこんな……」

「い、いやいや、ま、魔法使いに年齢なんて関係ないよ？ うん。い、今こそ青春を謳歌してるんだ。それに老化を和らげる魔法かけてるから若く見えるのも無理はないし。……え？ にしても童貞だって？ 童貞クサイとか言わないで。泣いちゃうよ？」

巡の中で道程の評価が童顔小型中年男性からロリコン童貞変態ジジイにクラスアップした。

母親の年齢から逆算しても道程の実年齢が五十過ぎであろうことは間違いない。

だが栄養がたっぷりまってそうなふつくらとした丸顔、それに妙に甲高い声はどう見積もっても三十代、下手すると二十代に見えなくもなかった。

「てことは道程さんが男性で唯一魔法が使えるってことですか？」

「男は基本使えないけどね、お兄ちゃんと似たような境遇の同志はいるよ、四天童っていう四人の童貞とかね。みんなお兄ちゃんより年下だけど、結構な使い手だよ」

「それは……なんかすごそうですね……。そのほかは美少女限定ですか？ でもなんで？」

「だって美少女しか入学させないし教えないもん」

「……教えれば誰でも使えるってことですか？」

「全然ダメな子もいるからやっぱ人によって適正あるよ。でも大体血縁だね。そのへんで女の子をさらってきたりするわけじゃないから、入学する子達も身内の紹介とかがほとんどだし」

「僕は誰にも魔法の使い方とか教えてもらってないんですが……」

「多分メルちゃんに魔法をかけられたショックで目覚めたんだと思うよ。君はきつと天才だね」

巡はてつきりメルの呪いのせいだと思っていたが、そういうわけではなかったようだ。

女の子になれば魔法力が覚醒する。メルは巡の中に眠る魔法の力を感じ取ったと言っていたが、果たして本当にそこまで見越していたのだろうか。

「でさ、さっきのお仕事の話なんだけど。どうかな？」

道程がそれた話を元に戻す。どうしても巡をスカウトしたいようだった。

「うーん……それって具体的にはなにをするんですか？」

「ああ、そうだね、えーっと」

そう言って背後の棚から大きめのファイルを取り出し、綴じられたリストをぺらぺらめくってみせる。

「これが要注意人物のリスト。ちょっと度が過ぎるかなって感じのね。この子たちをおとなしくさせてほしいんだ。お兄ちゃんちょっと怒ってるよって。あんまり反抗するようならおしおきするんだだけ」

最初に出てきたのは名前や生年月日から趣味やスリーサイズまで記入されたオリジナルの履歴書。

続いて顔のアップや全身を前後左右から撮った写真、制服バージョンや普段着バージョン、シチュエーション別などと書かれて分類された写真がアルバムのように綴じられていた。

中には被写体が明らかにカメラを認識していない盗撮らしきものもあつた。

ざっと見たところ三、四十人はいそうである。そのどれもが美少女ぞろいだ。

「これは……す、すごい……」

「まあまずはこの危険度のところを見てもらって、一番簡単なEランクぐらいの子からやってもらおうかと」

「ランク付けとかしてるんですね……。どうやって決めてるんですか？」

「基本的には魔法力の強さと、どういった使い方をしてるかだね。後は性格。どんな問題行動を起こしたか、または今後起こしそうかとか、そのへんを総合的に判断してのランクね」

「ふん……」

「……Eランクが一番簡単ってことは、EからAまで格付けがあつてAランクが最高かな？」

ずいぶん幅があるみたいだけど、最高ランクにされる子って一体どんな子なんだろうな……。

道程に渡されたリストをパラパラめくっていると、不意に見慣れた笑顔が視界に飛び込んできた。

潮見夢留 愛称 メルちゃん 危険度SSランク

……ヤツだ。もしかして、とは思っていたけど、やっぱりいた。しかも危険度SSって……。Aが最高じゃなかったのか……。

巡は一瞬手を止めたが、履歴書のどこかの欄にオニーというあり得ない単語が記入されている（おそらく本人の字）のが目に入ると反射的にページをめくった。

痛々しいプロフィールを直視することができなかったのだ。

「……危険度SSって、要するにどのくらいなんですか？」

「ええと、間違いでも魔法を教えた事を一生後悔しそうなレベルかな……」

「後悔っていうか全人類に対して謝罪すべきですよ……。さっきなんで注意しなかったんですか？……SSランクを」

「……ほら、これぐらいの女の子って傷つきやすい年頃じゃん。お兄ちゃんだって嫌われるのやだし。それにあの子、お兄ちゃんがなに言っても聞かないし……」

「傷つきやすいって言うか……。逆にこっちが大怪我します……」

……ダメだこの人。

これ以上メルのような災厄を誕生させないためにも、この男を始末した方が世のため人のためになるんじゃないかと、ふとそんな考えが巡の頭をよぎるのだった。

お兄ちゃんは大魔法使い？ 6

「それでその……ちなみにお金つてどのくらいもらえるんですか？」

「それは成果によるけどね。当然ランクが高い子を更正させれば報酬もはずむよ。Aランクだったら一千万ぐらいだしてもいいかな」

「ええっ！？ そんなに！？」

「これならAランクだった三人で呪いが解けるよ。それにこれで稼げば君のお母さん、南ちゃんだって戻ってくるかもしれないよ？

お金がないから出ていったんでしょ？ いい話だと思っただけだなあ」

「それだけが理由じゃないんですけどね……。あ！ そうそう。そういうえば環の入学、取り消してください。やっぱりこんないかがわしいおじさんの所で、写真撮られたりとか危険です」

「いかがわしい……。それはダメ、絶対無理！ 途中退学は規約違反で罰金一億だからね！」

「なんですかそれ高っ！ ……それって今決めたんじゃないですか？」

「あ、そうだ。めぐる君ががんばって一億ためればいいじゃん。高ランク狙いで行けば不可能でもないよ？ 呪いと合わせて一億三千万」

「……うん。でもよく考えたら何で僕がメルちゃんにかけられた呪いを消すのに三千万お金払わなきゃならないんですか。直せるんなら直してくださいよ。被害者ですよ僕は」

「またケチくさいな君も。……別にいいけどね、男に戻っちゃったら魔法は一切使えなくなるよ？ 魔法抜きでリストの子たちと渡り合うことなんてできないからね。そしたらお仕事は任せられないな。この話は一切なし。すると報酬はもらえず環ちゃんはそのまま。めぐる君のしよっぱい貧乏生活もそのままだよ？」

「……うつうつ」

環が学校に通い卒業すれば金が入ってくる算段だったが、道程という人物を知ってしまった巡は妹をこのまま通わせる気にはなれなくなった。

道程の言い分はもつともで、それに従えば妹の代わりに自分が仕事をこなしてお金を稼ぐ事になるわけだが、どうにもうまく騙されている気がしてすぐに首を縦に振れない。

いつの間にか桁外れの金額が飛び交っているが、そもそも本当にそんなお金が道程に用意できるのだろうか、という疑問もある。

しかし結局妹をこの男の毒牙にかけさせるわけにはいかないという気持ちがそれに勝った。

そして彼自身、今の貧相な生活から抜け出したいという思いもあった。

そうした葛藤の末、巡はゆっくりとうなずく。

「……わかりました。僕やります」

「おおっ！ やった！ これでまたハーレムに一人追加！」

「……今なんか言いました？」

「え？ なにも？」

「まあいいです。でもひとつお願いがあります」

「うん？ なに？」

「環のことなんです……。お金が溜まってから、じゃなくてできれば今すぐにでも退学させたいんですが」

「……むむ？」

またも道程が長考に入った。何を必死に考えているのかわからないが、その様子からはプロの棋士のような気迫を感じた。

ものすごい速度で損得勘定をしているのかもしれない。

やがて結論が出たのか、人の良さそうな笑みを浮かべて言う。

「しょうがないなあ。南ちゃんの頼みとあつては聞かないわけには
いかないしね。いいよ。それで」

「……僕、南じゃなくて巡です」

「一億円分ツケとくから頑張つて働いてね」

「はあ……。わかりました」

あまりにも簡単に莫大な貸しを作ってしまったことになるが、
そもそも普通に考えればいろいろおかしい。おかしいことだらけだっ
た。

かといって細かくつつこめば、道程のさじ加減一つでさらに金額
なり条件なりが二転三転しそうだったので巡はここで妥協すること
にした。

道程はロリコンオヤジではあるが、根っからの悪人ではない。巡
はそう思ったからだ。というかそう思ったかった。そんな救いよう
のない人間が存在しない事を。

巡がいんちきくさい誓約書のようなものにサインをし終えたその
時、コンコンとドアをノックする音が。

扉を開けて現れたのは、短く刈りそろえられた頭髮にサングラス、
黒いスーツを身に着けたやけに体格のいい男性。

身長は190センチぐらいはあるだろうか。

無言のまま表情を変えず立ち尽くす姿は、まるで重要人物を護衛
するSPのようだった。

どこからともなく漂う存在感と威圧感ほ明らかに場違いな印象を
与える。

「なに？ どしたの？ ……あ」

道程は変わらぬ調子で男に問いかける。

いきなりの巨漢の出現に驚く様子はなく、道程の視線はその男性

ではなく彼とともに入室したもう一人の人物に注がれていた。
サングラスの男性に首根っこをつかまれている人物。それは巡の
クラスメイトの美道衆だった。

「衆ちゃん……また？」

「……ご、ごめんなさい……。つい本能に忠実になっちゃって……」

「つい魔が差したとかって言っちゃったなあ……」

道程が呆れたように言う。

巡はスーツの男性にも驚いていたが、さらに突然見知った顔が現れたので少し頭が混乱しかけていた。

「し、衆くん……？ どうしてここに……」

「巡か……。君も来てたのか……」

「あれ？ 二人知り合いなんだ。あーそつかあその学校だっけ。
まあそれはいいとして、衆ちゃん……。これで五回目だよ？」

「五回目って衆くん一体何を……？」

「また男の子をストーキングして通報されたんでしょ？」

「違うんだよ、通報はされてないんだ、今回はたまたま職質受けた
だけで」

「それでちよっと近くの交番まで来てねコースなんだから変わらな
いでしょうが」

ああ……なんか朝不良に絡まれた？ 男の子を助けたとか何とか
……。それかな？

「今回は自分が保護者として引き取りに行きました」

ずっと無言だった男性が低い声を発した。

「そう……ご苦労だったね。……衆ちゃん、約束は約束だからね、いいね？」

「……………はい」消え入りそうな美道の声。

「じゃあ後はよろしくトモヤ」

「了解、ボス」

トモヤと呼ばれた男性はそのまま美道を引きずって再びドアから出ていく。

そういえばあの扉の先はどうなってるんだろう？ などと疑問に思う巡の耳にかすかな呟きが聞こえた。

「はぁ……………あかりちゃんルートがそろそろ終わりだったのに」

幻聴であつて欲しいその声は間違いなくスーツに身を包んだ男のものだった。

お兄ちゃんは大魔法使い？ 7

「何者なんですかあの人は」

二人が去った後、巡は謎の男について疑問を口にした。

「ああ、あれ四天童の一人だよ。コードネームはトモヤ」

「あれが四天童……。コードネームって割には普通の名前ですね……」

「だってあいつが自分でそう呼んでほしいって。どうせどつかのギヤルゲーの主人公かなんかの名前じゃない？」

またか……。

巡は心底うんざりした。まともそうなのが出てきたと思ったが、見かけだけだったようだ。

「まあそれはいいとして、明日からめぐる君一人でやれっていうのもかわいそうなんで、衆ちゃんと協力してやってもらうようにするから。ちようどよかった」

「え、いや、一人でやります。あの人はいません」

「まあそう言わずにさ、一応彼は君の先輩にあたるわけだから。……」

「まあほとんど成果が出てないんだけどね」

「衆くんはどういった経緯でこんな……」

「話すと長くなるけど、お兄ちゃんの中で男の娘ブームが来てた頃ね、彼を女の子として……」

「やっぱいいです。聞きたくないです」

「すぐ飽きちゃったからね、彼には申し訳ないことをしたよ。罪滅ぼしといっては何だけど、彼にタダで部屋を貸してあげてるんだ。詳しい事は知らないけど衆ちゃん身寄りが田舎のおばあちゃんぐら

いしかないらしくてね。まあいろいろと面倒を見てあげてる」
「はあ……そうなんですか……」

巡は知りたくもない事情を知ってしまったって微妙な反応しかできなかった。

「大丈夫、衆ちゃん今はアレだけどきちんと更正させるから。明日から仲良くやってね」
「えー……」

急に憂鬱になった。協力というか障害になりそうな予感しかしない。

今までも極力かわり合いを避けていたぐらいなのだ。それでも妙に気に入られてはいたが。

「じゃ、最後にめぐる君の連絡先だけ教えておいてくれるかな。携帯あるでしょ？」

「嫌です」

「……即答されるとお兄ちゃんでもちよつとへこむよ？ 何かあったときとかさ、困るでしょ？」

「教えた方が何かありそうなんですが……」

「めぐる君、あんまり反抗すると契約破棄しちゃうよ？ そしたら別途違約金発生するからね。さっきサインしたでしょ？ 基本的にお兄ちゃんの言う事には従わなければならないんだからね？」

「わかりましたよ……」

やっぱり自分の決断は間違っていたのかもしれない。

早くも後悔の念に駆られながらも、巡は道程と連絡先を交換した。

「これで一通り用件は済んだね。じゃあお家の近くまで魔法で転送

してあげるから、目をつむって」

「……ちよつと待ってください、よく考えたら僕、このまま女の子として生活しなきゃならないって事ですよね？ 今日一日はなんとかごまかせましたけど、やっぱり無理がありますよ……」

「ふふっ、たしかに明日から女装して学校に行くというのも無茶な話だよ。そうだなあ〜うん」

道程は後ろの戸棚をこそごとと漁りだした。

取り出してきたのは赤いベルトの腕時計。特に何の変哲もない。

「これで解決できるよ。魔法を込めるのに時間かかるからもうしばらく待つてね。あ、ご飯食べてく？」

「いや、できるだけ早く帰りたいんですが……」

道程は巡の返答を無視し、夕食を用意すべく奥の部屋に引っ込んでいった。

その後姿を見ながら、巡はどうにも不安を拭えなかった。

今日帰れるのかなあ……。明日から本当に大丈夫なんだろうか……。

翌日。

巡は遅刻することなく登校した。

昨日遅刻＝変態魔法少女との遭遇というトラウマを植え付けられたせいか、巡は何かに追われるように始終急ぎ足だった。

途中下駄箱で発見した「昼休みに体育倉庫でまっています」という紙切れを破り捨て、教室へ急ぐ。

教室に入る前に、遠目から隣の席にメルがない事を確認しほつと胸をなでおろしながら自分の席に向かう。

席に着くとすでに登校していた花奈が顔をこちらに向けた。

「ねえ」

「は、はい？」

「なんで男子の制服着てるの？」

「いや、それはだってほら、僕男だし。だいたい女子の制服なんて持つてないよ」

「……うん？」

じろりと顔全体をなめまわすようにねめつけられた。
至近距離で綺麗な顔に見つめられ、どきまぎする巡。

「ちっ、元に戻ったか。にしても男のクセに女々しい顔つきね」

何かお気に召さなかったようで、いらいらした口調で罵倒される。
だが花奈が男子に対してご機嫌斜めなのはいつものことで、昨日が異常だったただけだ。

「そ、そうなんだ、昨日道程さんに会って元に戻してもらったんだ
……はは……」

「……おかしいわね……、あいつがそんな簡単に人助けなんて……」
「道程さんて変わった人だよな」

「……ふん。ねえ、なにその腕時計。……ださ」

花奈は巡の手首に巻かれた腕時計を目ざとく見つけた。

女の子がするような赤いベルトの腕時計はやけに目立つし巡には似合っていない。

だが今一時的に男に戻れているのもこの腕時計のおかげなのだ。
外すわけにはいかない。

「あ、あの僕さ、よく遅刻してたから、すぐ時間を確認できるように時計したほうがいいかって」

「あっそ」

花奈は鼻を鳴らただけで、これ以上巡と会話する気はないようだ。

昨日とはうって変わって冷たい態度に、巡は困惑を隠せない。

……なんか昨日の御厨さんが別人みたいだなあ。少し寂しい気もするけど、本来こういう感じなんだから仕方ないか。

気まずい空気を吸いながらかばんの中身を出して整理していると、教室前方の引き戸が勢いよくがらりと開かれた。

バーン！ という効果音がつきそうな勢いで登場したのは美道だった。

巡は激しい既視感を覚えたが、今日はどうにも美道の様子が違っていた。

「おはよう！ 愚民ども！」

喧嘩上等？ 生意気暴力少女 1

美道はクラスメイト全員に喧嘩を売った後、悠々とした足取りで教壇に上る。

「皆の者聞け！ 俺はもう男の尻を追うような真似はやめた！ だから男子！ もう常に半径三メートル以上の距離をとる必要はないぞ！」

美道が声高にそう叫ぶと、教室内にどよめきが走る。主に男子の間に。

「あいつ気づいてたのか……俺たちの暗黙のルールに」「なんであいつ上から目線なんだ？」「みんな気をつける！ これは畏だぞ！」

「誰だ今畏とか言ったヤツ！ こっちに來て尻を出せ！」

「やっぱりあいつ掘る気満々じゃねえか！」「誰だよ、余計なこと言って刺激すんなよ！」「やっぱり畏じゃねえかよ……」

警戒する男子達。

美道は大げさな身振りを交えてそれをなだめる。

「待て待て。尻を出せと言っただけだぞ？ つまりケツをシバいてやるという意味だ。すぐにそういう方向に持っていくお前らの方が問題だろう？」

「今度はSMかよ……」「これからは五メートルだな……」「おい、もういいだろ、あいつに触るなつて」「ガチホモ野郎は消えろ！」

口々に言い合う男子生徒たち。その中の一言に美道がピクッと反応した。

「……今言つてはいけない事を言つたヤツがいるな……」

静かに室内を見回す美道。厳しい目つきで犯人を捜しだす。

男子生徒たちはみんなすぐに顔を伏せたが、わずかに行動が遅れた巡は一瞬だけ美道と目が合ってしまった。

「巡、お前かあ！」

「ち、違つよ！」

美道はずんずん大またで巡のほうにやってくると、前方に立ちはだかるように仁王立ちして見下ろしてくる。

「さあ、臀部を晒しわが面前に跪くがよい！」

「だ、だからっ、さっきのは僕じゃないって！」

「お前じゃなかったとしてもお前だったということにしておいてやる。よかったな」

「よくないよ！……衆くん、一体何があつたの？ もともと変わつてたけどこんなメチャクチャな事を言う人じゃなかったでしょ？」

「……俺は間違つていたようだ。昨日あの後みっちり教え込まれた男とエンディング「バッドエンドだということを」

「何を言ってるのか全然わからないんだけど……。それに俺って……、昨日までとなんか別人みたいだよ？」

「これからは俺様キャラでいけば間違いないと、古今東西のエロゲー、ギャルゲーを制覇しついに乙女ゲーにまで手を染め出したトモヤさんに言われたのだ」

「そんな人の言うことなんて聞かない方がいいと思うよ……」

「そういうわけで巡。お前俺と付き合え」

「嫌だよ！ だいたい僕男だし！」

「……んん？ お前元に戻ったのか？ ……男子との交際はトモヤさんに固く禁じられたからな、バレたらブチ殺される」

美道はちらつと隣の席の花奈を見た。

花奈は我関せずとばかりに携帯をいじっている。

「じゃあ花奈。俺の奴隷になれ」

「死ね」

「仕方ない、言い方を変えよう。俺と付き合え」

「さっさと死ね」

「とりつくシマもないな。せめて『なんであんなかとおつ……！』
ぐらい言えんのか？」

「いいから死ね」

「貴様、後悔するぞ？ 俺の美貌は誰もが認めるところだ。過去に
女子からラブレターをもらうこと数知れず」

「何も知らなかった哀れな子たちからね」

「以前の俺には尻を拭く紙にも使えないゴミクズ同然のものだったが、
これからしっかりとフラグ管理を行おうと思う」

「無駄よ。あんたの性癖については校内で知らない人間はいないで
しょうし」

「俺は変わったのだ。これから女子と楽しそうにしていればその疑
惑も自然と晴れるというもの。ハーレム要員その一にならないうち
に俺に従った方が得だぞ？」

「これは……格段に痛さが増したわね……」

「お前との同盟も破棄だ。思えば男子を紹介してもらった代わりとし
て魔法の悪用に目をつむるなど、我ながら恥ずべき行いをしたもの
だ」

「ちつ。急に手の平返したわね……。そもそもね、あんたの存在そ

のものが恥ずかしいのよ」

「御厨花奈。貴様の罪状は気に入らない男子生徒のロッカーに使用済みナプキンを放り込む等をはじめとした変態チックな迷惑行為だ。俺が断罪する！」

「そんなことしてないわよ！ 第一それじゃ魔法関係ないじゃない！ あんたマジで死なすわよ？」

「馬鹿め、俺のバックには四天童の一人がついてるんだ、そんなことをしたらどうなるか……ククク」

殺意のこもった目つきで睨みつける花奈を、不敵な笑みで迎える美道。

これまでも危うい関係ではあったが、ここにきてついに爆発した。今は花奈がやや不利な状況か。

やがて両者にらみ合いが始まる。

「花奈様、負けないで！」「私も花奈様にあんな目で見つめられたい……」「死にくされ美道！」「もげる！」

女子生徒がわけもわからないまま声援？を送る。美道の味方はいなかった。

男子生徒たちはすでに皆知らんぷりを決め込んでいる。何人かは教室を離脱した。

巡も隙あらば脱出の機会をうかがっている。

まさに一触即発。

「やめて！ 二人とも！ わたしのために争わないで！」

その時、ひととき大きな声で二人の間に割り込む女子生徒が。

一気にクラス全員の視線がその人物に集まる。

その人物とはやはりメルだった。今登校してきたのか、いつの間

にか、どこからともなく現れた。

ぽかんとする美道と花奈を尻目にメルは一人続ける。

「二人の気持ちはうれしいんだけど、今わたしは……」

メルの視線が巡の席へ向く。

だが席はすでもぬけの殻だった。

身の危険を察知する能力が芽生えはじめていた巡は、メルにみんなの注意が集まった瞬間に脱兎のごとくその場を抜け出していた。

喧嘩上等？ 生意気暴力少女 1（後書き）

サブタイトルはちょっと先走った感じになってますが、お氣になさらずに。

すっかり変態が出揃ってしまつて、新キャラの入る余地がないかも……。

喧嘩上等？ 生意気暴力少女 2

巡は教室から少し離れた所にある男子トイレに緊急避難していた。メルが来てしまった以上、なんだかんだであの二人の争いに巻き込まれるのは火を見るより明らか。

騒ぎが収まるまで教室に戻るのは危険だ。うかつに近寄らない方がいい。

だがまだホームルームまで少し時間がある。

巡はついでに用を足すと、チャイムが鳴るまで誰もいないトイレで時間を潰すことにした。

……はあ、僕は朝から一体何をやってるんだろう。

なんでトイレなんかにもって……、……ん？ 待てよ、よく考えたら何で僕がこんな惨めな思いをしなければならないんだ？

何も悪い事なんてしてないはずだ。そうだ、ビクビクすることは。昨日みたいに外見が女の子になっているわけじゃないんだ。堂々としていればいい。

メルちゃんにだってビビる必要なんてない。なんかおかしい言動をしたら、次からはビシッと言ってやるべきだ。

まったく、バカバカしい。さっさと教室に戻ろう。

巡はしばらく一人葛藤した後、勢い込んでトイレの入り口のドアを引いた。

すると目の前にメルの姿が。

巡はフルパワーでドアを押して再びトイレの奥へ後退した。

……おかしい。なんで奴が？ ついに恐怖で幻覚を見るようにな

ってしまったんだろうか。

いや、違う。僕は恐れてなんかいない。そう、ビビってなんかいないぞ。

今のはきつとメルちゃんに似た人が偶然男子トイレの前に……。

巡が必死に自分をごまかそうとしていると、トイレの中にすぐさま侵入者が現れた。

その人物は微笑を浮かべたまま、まっすぐ近寄ってくる。

例え男子トイレだろうが全くためらいのない足取りは、間違いなくメル本人だった。

ついさっきまでいきがっていたはずの巡は情けない声を上げた。

「ちち、ちよつと！　ここ、男子トイレだよ！」

「それがどうかした？　たまには男子トイレで用を足してもいいよね？」

「ダメに決まってるでしょ！　たまにとか気分の問題とかじゃなくて！　何のために部屋が分かれてると思ってるの！」

「えっ？　小便器にしないとダメ？　ヤダめぐるちゃんったら！」

巡は早くも言葉を失い、戦意を喪失した。ビシッと言ってやるつもりが一瞬でメルのパースに飲まれてしまった。

「めぐるちゃん急にいなくなっちゃってビックリしたんだよ？」

「いや、急におなかが……」

「わざわざ離れたトイレまで？」

「……ど、どうしてここが」

「魔法の力だよ、ま・ほ・う」

また魔法か……。本当に魔法なんだろうか？　メルちゃんの場合、

野生の勘とか言われた方がしっくりくるような……。

なんでも魔法と言われて納得できるものでもなかったが、口には出さなかった。

何か言いたそうな顔をしている巡を見て、メルは少しだけ驚きの表情をした。

どうやら性別の変化に気づいたようだ。

「あれ？ めぐるちゃん元に戻っちゃったの？ つまんない」

「つまんないじゃないよ！ 全く誰のせいでこんな……」

「と、いうことはもう一つの魔法も解けたのかな？」

メルの言うもう一つの魔法とは、二次元の老人にしか興味をもてなくなるという、実質性欲を失うようなわけのわからない呪いのことだ。

今の巡は、道程の用意した腕時計によって一時的にメルにかけられた魔法が全て解けている状態である。

完全に魔法が解けたわけではないが、メルと出会う以前の彼に戻っているのだ。

メルがいくら変態といえど女の子であることに変わりはない。それに性格に目をつむれば相当な美少女だ。

そんな子とトイレで二人きり。昨日は呪いのおかげがおかしな気分になることはなかったが、今は勝手が違う。

それに彼女は必要以上に至近距離までにじり寄ってくるきた。

こういった状況に慣れていない巡は、どんどん心拍数が上がっているのを悟られまいと質問を浴びせた。

「ち、近いよちょっと……、あ、朝からどこ行ってたの？」

「ちよつと体育館倉庫に下見にね」

「……言つとくけど昼休みそこで待っても誰も来ないからね」

「え？ なんでわたしが呼び出したって知ってるの？ 差出人は書

「かなかったのに」

「昨日の今日でそんなところに呼び出す人っていったらね……。せめて体育館裏とかにすべきだったと思うよ？」

「……名前を書いたら来てくれないでしょ？ わたし、うすうす感づいてたんだ、なんかめぐるちゃんに避けられてるって」

「そりゃ昨日の晩夜中に何回も電話かけられたら電源切らざるを得ないよ……。朝起きたら着信履歴がメルちゃん（はあと）で埋まってるって軽くホラーだったし……」

「メルちゃん（笑）で登録しておけばよかった？ そうすれば笑えるよね？」

「余計怖いよ！」

巡は連絡先を教えた事を後悔した。とはいっても携帯を奪われ勝手に登録されたのだが。

だがこれほどまでに女子から熱烈なアプローチを受けたのは初めてだ。

考えようによってはそこまで悪い気がしなくてもない。

なんだかんだいってもメルの外見は優れてかわいい。巡のこれまでの人生においても間違いないく三本の指に入るほどだ。

巡はこれでまともな子だったらなあ、などとありえない願望を頭に思い浮かべた。

「にしても本当にわたしの魔法解けたのかな？ ……あやしい」

メルは訝しそうに巡の体を見つめ回す。なぜか疑っているようだ。

自分で魔法をかけといて、ひどい話だった。

「なにか魔法アイテムの匂いが……」

腕時計のことや、道程から与えられた仕事のことはなるべく黙っておきたかった。

明確な理由はないが、やはりメルがかんでくるとろくなことにならないそうだからだ。

巡は気づかれないように赤くて目立つ腕時計を袖の中に隠すように移動させた。

さりげなくやったつもりだったが、メルはそのわずかな動きも見逃さなかった。

獲物を見つけたとばかりに巡の手首に手を伸ばすメル。袖をまくつてがっと思らいつく。

「ち、ちよつと！ なにいきなり引きちぎろうとしてるの！」

「なにこの腕時計？ 昨日はしてなかったよね？」

「え？ あ、ちよつと遅刻が……」

「これ女物じゃないの？ どういうことかなあ？ 自分でこんなの買わないよね？ 誰かにプレゼントでもされたのかなあ？」

「やめてやめて、ちぎれるって！」

メルは鬼のような力で掴んで放さない。

このまま有無を言わせず引きちぎられてもしたら目も当てられない。

巡は観念して道程にもらった腕時計の事を白状した。

「……ふん、それをつけている間は呪いが解けるの？ 便利だね」

「これね、余計にお金ふっかけられたんだよ？ お願いだからいきなり壊そうとしないでくれる？」

「ねえ、ちよつと外してみて？」

「ええ？ やだよ」

「外してみて？」

ギリつと手首を掴まれた。みしみしとメルの手が食い込んでゆく。

……自分で外せるうちに外しておこう。

巡はあきらめてするつと腕時計を外した。

一瞬ピカつと全身からまばゆい光が放たれたかと思うと、巡の外見が昨日と同じ姿になった。

喧嘩上等？ 生意気暴力少女 3

「うわゝ、すごい。一瞬でお肌が白くなってムダ毛とかもなくなってる。でもなんか気持ち悪いね」

瞬く間に女子に変身した巡を見て、メルが感嘆の声を上げた。

「……あのさ、いくら僕でも怒るよ？」

「それにちよつと声も高くなってる！ あれ？ でも胸元は全然スカスカだね。かわいいそうに、貧乳なんだね。どれどれ」

「どれどれじゃない！ もうこれでいいでしょ？ 元に戻っても」「ちよつと待って。めぐるちゃんがいけないものを持ってきてないかボディチェックをします」

「持ってきてないよ！ なんでこのタイミングで!？」

「だって男の子の体をいじくったりしてみんなから痴女だと思われたら困るし……」

「いまさら取り繕っても手遅れだと思うよ！ 多分みんなうすうす感づいてきてるよ！」

「あ、でもここならそんな心配する必要ないよね。誰もいないし。うん、戻っていいよ」

メルはそう言ってさらに距離をせばめてきた。今にも襲い掛かってきそうだ。

本来なら巡も一応健全な男子であるわけで、こんな場所で一方的に女の子から迫られたらなにかしら間違いが起こってしまうかもしれない。ついさっきまで少しではあるが巡自身もまんざらでもない気分だった。

だが今、再び魔法がかかった状態になり性欲が失せた巡は、メルの急接近にもたじろぐことはない。

むしろ彼女のふるまいに軽く腹を立てているぐらいだ。もちろん変な気持ちになることもなく、全力で抗うつもりでいた。

今戻ったらし崩しに犯される！

そう直感した巡は、このまま様子を見ることにした。

それにここで文句の一つでも言ってやらねば、という思いもあった。

「あれ？ 戻らないの？」

「……うん。あおさ、メルちゃんももうさ、悪ふざけもたいがいにしようよ。勝手に人に魔法かけたりして困らせてさ。僕すごく迷惑かけられたんだけど、まだちゃんと謝ってもらってないよね？」

巡は静かに、だが確かに怒気を含んだ声音でゆっくり諭すように言う。

そんな巡の様子がいつもと違うのを感じ取ったのか、メル顔からも笑みが消えた。

「……ごめん。そうだよ、怒ってるよね……。わたし、めぐるちゃんにすごい迷惑かけてるね。それなのにちゃんと謝りもしないで……ごめんなさい」

つらそうな表情で謝罪の言葉を口にするメル。そしてそのまま口を閉ざす。

意外な反応に、巡は少しばかり驚いていた。どうせまったくない言い訳をするものとはかり思っていたから。

二人とも沈黙したまま、時間が過ぎていく。

……よかった。メルちゃんもちゃんと話せばわかってくれるんだ。さっきからうつむいて黙ったままだし、きっと少しは反省してく

れているんだろう。そろそろいいかな。

「わかったよ。もう怒ってないから」

「……ホント？ 怒ってない？ じゃあこれから、仲直りのセツ……」

「あー、はいはいもうしゃべらなくていいから黙って反省して」

「めぐるちゃんのお説教プレイ、楽しみだなあ」

「知らないよそんなプレイ！ 聞いたこともない！」

「ね、お詫びといってはなんだけど……わたしの体を好きにしていよ」

「お詫びといつては難だよ！ もうそいつのもいいから！」

急に活気づくメルに巡は閉口する。

まったく、すぐに変な方向に持っていこうとするんだから……。

「それじゃあ、せめてプレゼントさせて。今のめぐるちゃんにぴったりのがあるんだよ」

そう言つてメルはごそそと制服のブレザーの内側を探る。

やがて取り出したのは、片手で握り締められるぐらいの太さの黒い棒。

「これ！ 魔法のステッキだよ！」

「魔法のステッキ……。なんか妙に短くない？」

「伸縮式だからまだ伸びるんだよ」

メルが棒の両端を持つて引っ張ると、すこし長さが伸びた。最終的にひじから指先ぐらいの長さになる。

「これね、例によって振動機能付だよ」

「いらないよそんな機能！ だいたいそれどんな慣例なの！？」

「それをわたしに聞くの？ セクハラだよめぐるちゃん」

「ごめん、聞いた僕が悪かったよ」

「うっん、いいの。メルちゃんが教えてあげる。むしろ言わせて！」

「言わなくていいよ！」

その時メルが差し出したステッキ？ がブイイインと振動を始めた。

「見てほら！ すごい、めぐるちゃんの魔法力に反応してるよ！」

「嫌な反応の仕方！」

メルがバイブステッキを胸に押し付けてきたのですばやく奪い取った。

不本意ながらも受け取ってしまったステッキは、見た目より意外と重い。

巡が手にした後も棒はしばらく小刻みに震え続けていたが、巡の止まれという念を感じ取ったのかやがて振動は止まった。

「それ、わたしが持つてると色違いのおそろいなんだよ？ めぐるちゃんだったらもしかしてメルちゃん専用の魔法が使えちゃうかも」

「メルちゃん専用の魔法？ それってどんな……？」

「簡単なやつだと、飛雷矢魔法フェザーライトニングかなあ。フェとラを強く発音するの。あとこの棒を股に……、じゃなくってステッキを魔法を当てたい標的に振りかざしながら叫ぶの」

「……ふ〜ん。……え〜と、ふ、フェザーライトニング！」

巡はメルに説明されたとおり、ステッキをかざしてセクハラワードを口にした。

その瞬間、ステッキの先から放たれた雷の矢は、まっすぐ飛んでメルに直撃する。

ピシャッ！ バババリバリバリ！

メルの体のシルエットが激しく明滅する。巡は強い発光に思わず目をつむった。

やがて焦げくさい匂いが立ちこめる。

おそろおそろ目を開けると、メルの顔がすぐ目の前まで迫っていた。

「ちよつとめぐるちゃん……。いくらわたしが嫌いだからっていきなりそれはないよね……？」

唇の端をやや吊り上げているものの、メルの目は笑っていなかった。

「ああっ、ごめん！ 本当に使えるかどうか試しに唱えてみたら……」

「絶対わざとだよね今の……？ まっすぐこっち飛んできたよ？ とつさにバリヤー張らなかつたらメルちゃん確実に死んでただけだよ」

「い、いやだって雷を当てたい相手について………あ、ぎ、ぎゃあああっ！」

メルは必死に弁解する巡の乳首をシャツの上からつねり上げた。いきなりの激痛に悲鳴を上げる巡。

別にメルを亡き者にしてやろうと考えていたわけではなく、ついすっかり考えなしに魔法を発動させてしまっただけだった。

本当に魔法が使えるのか、半信半疑だったのもある。

だが無意識にも標的はしっかりメルだった。

「いけないこと言うのはこの乳首かなあ!？」

「ち、乳首はしゃべらないよ! いたたたた!」

「乳首をしゃぶりたい? そうやってごまかそうとして!」

「ち、違うつて! は、放して、ごめん、ごめんなさい!」

必死の懇願が聞き届けられたのか、乳首をねじ切られる前になんとか解放された。

だがメルは怒りは完全に収まったわけではないようだ。

「今度やったら母乳が出るまでねじり回すからね?」

「で、出るわけないでしょそんなの!」

「え? 出るでしょ? しかるべき手順を踏めば」

「ひいつ!」

笑顔で恐ろしい事を言い放つメル。

口調は明るいものの、さすがに巡のうっかりで殺されかけるのはたまったものではないのだろう。

えもいわれぬ迫力があつた。

やはりメルには逆らつてはいけないと、巡は深く心に刻み込んだ。

「やっぱりステッキは没収だね。メルちゃんもさすがに命は惜しいし」

「あつ」

目にもとまらぬ速さでメルにステッキをひったくられた。

メルがときおり見せる強靱な腕力や俊敏な動きはどこから来るのだろうか。きつとこれも魔法なのだろう。魔法であつて欲しい。

どちらにせよ半ば人間離れたこの子と、これから関わらざるを得ないであろうことは明白だ。

そんな時あのステッキがあればいざという時自衛手段として使える。

そう考えた巡は、なんとかして取り返そうと言葉を繕う。

「せ、せっかくメルちゃんがプレゼントしてくれたんだし、ありがたく受け取っておくよ」

「なに？ そんなに欲しいの？ じゃあ、どうしてもその黒くて硬い棒が欲しいですって言うて」

「……えっ、……………ど、どうしても、その黒くて硬い、ぼ、棒が欲しいです」

「はい、大きな声でもう一回！」

「ど、どうしてもその黒くて硬い棒が欲しいです！」

くそ、なんで僕がこんな事を……。でもここは耐えろ。気にするな、機嫌を損ねないように……。そう、これはただの発声練習だ。

「なんかキレ気味に言われてもなあ。まあいつか、元はといえば

おわびのしるしって話だったしね。でも、もしメルちゃんを背後から撃つようなマネしたら……わかってるよね？」

「わ、わかってるよ。僕がそんなことをするわけじゃないじゃない」

いざとなったらやるしかない。

もちろんできればそんなことはしたくないけど、それも全部メルちゃん次第だ。

ていうか闇討ちされるようなふるまいをしている自分を改善しようとは思わないのかこの人は……。

再びメルからステッキを受け取った巡は、密かにそう決心しながら切り札を懐にしまった。

朝から一波乱あったものの、その後はこれといって大きな事件はなく一日の授業が終了した。

それでも細かい事を言い出したらキリがないが。

道程の腕時計のおかげで一時の平穩を取り戻した巡だったが、彼にはやらなければならないことがあった。

道程への貸しを返すための仕事のことだ。

その件で巡は放課後、美道とともに学校の屋上に来ていた。

「これが今回のターゲットだ」

美道が写真を何枚か取り出して見せる。

巡と美道は屋上の端っこ、給水タンクの陰で待機していた。

いかがわしいことをしているわけではないが、美道の指示でこうして隠れているのだ。

美道に渡された数枚の写真には、様々な角度から撮影された一人の少女が写っていた。

髪を一束結わえたショートヘアに、あどけない目元が印象的。全体的な雰囲気にはやや幼さが残る。

道程の眼鏡にかなっただけあって、かなりハイレベルな容姿だ。

か、かわいい……。こんな子、この学校にいたのかな？ 一つ下の学年らしいけど……。

うまくやったら仲良くなれたりして。

わっ、この写真……。

「おい巡、お前がつつり見過ぎだ。目つきが危ないぞ」

「……えっ？ ほ、ほら、ちゃんと特徴をつかんでおかないと」

巡はごまかすように言う慌てて写真から目を逸らす。美道はその様を見てためいきをついた。

「お前にはがっかりだ。そんなもので興奮するなんてな。これほどの美男子が目の前にいるというに」

「男子、でしょ」

巡は朝のトイレでのやり取りの後、すぐに腕時計を装着した。

基本的に魔法を使う時以外は腕時計を外す必要性はないと巡は考えている。その他に女の子になるメリットが見当たらない。

正確にはあるにはあるが、どこか犯罪のにおいがする用途ばかり思いつくので考えないようにしている。

ただ、性欲が失せるというメリットなのかデメリットなのかよくわからない変化もあるので、時と場合によっては使い道がないわけでもない。

「ふん、まあいい。では簡単なプロフィールを伝えておくぞ。赤桐^{あかぎ}陽夏^{りひなつ}、十五歳。三ヶ月前に転入。えー、身長百五十二センチ体重四十一キロ。バスト七十……おっとこの情報は必要ないな」
「いやそこからが大切な……」

七十……九、なのかジャストなのか。……どっちにしる残念な感じかな？

「そんなものはどうでもいいだろう。問題はアレがついてるかついていないか。それだけだ」

「なんかかつこいい言い方してるけど……。あれ？ 朝堂々と宣言してなかったつけ、もう男に興味はないとか何とか……」

「女々しいぞ巡。今はそんな事を言っている場合ではない」

怒られた。なんかますますよくわからない人になっちゃったな。無理やりパートナーにされたけど、うまくやっていけるだろうか。

「さてこの赤桐だが、現在危険度ランクはD。まあ低レベルな部類だ。だがこのランクはアテにならない」

「え？ なんで？」

「俺がつけたからな。俺が問題行動を発見して申請したのち、お兄ちゃんが危険リスト入りにした。つい最近の話だ」

標的は道程によってちよつと道を踏み外した魔法少女。巡はそう思っている。

道程の言い分によると魔法を悪用しているとかなんとか。だが巡は実際魔法だなんて、メルと出会うまで見たこともなかった。日常的に魔法が悪用されていると言われてもちよつと信じがたい。とにかく彼女は素行に難ありと判断されたということだ。

見た目は申し分ない美少女。巡には何が問題なのか、見当もつかない。

「そもそもこの子はどこに問題があるの？」

「まあそう慌てるな。すぐに見せてやる。そのためにこうして隠れているのだから」

屋上に上がるや否や、こうしてかくれんぼを命ぜられている。

正直言つて美道と二人きり、ずっと物陰にかがみこんでいるのは息苦しい。

授業終了とともにやってきてから、かれこれ二十分近く過ぎようとしている。

早くしてくれないかな、と巡が思っていると、屋上の扉が開き何者かの足音が聞こえた。だした。

巡はそろそろと給水タンクの後ろから首だけ乗り出して、屋上の出入り口のほうを確認する。

足音の主は紛れもなくさきほど見た写真の少女、赤桐陽夏だった。彼女は周囲を見渡ししながら悠々と足を進め、ちょうど屋上を中心あたりで立ち止まった。

屋上はそこそこの広さなので、よほど注意深くなければこちらに気づかれる心配はない。

しかしなぜ彼女は放課後一人でこんなところに来たのだろうか。手ぶらでやってきた彼女は、なにをするでもなく立ちつくしている。

これからなにか　つまりは大掛かりな魔法でも始めるつもりなのだろうか。

ことが起こるのを今か今かと待ち構えていると、陽夏がおもむろに制服のブレザーを脱ぎだした。

「おおつ。……うげっ」

巡は思わず身を乗り出す。美道はすばやくその首根っこを捕まえ引き戻した。

「何をしとるか。今見つけたら面倒だぞ。それにたかが上着を脱いだだけだろうが」

「こ、これからもつと脱ぐのかも……」

「アホかお前、そんなわけないだろう……。いったいなにを想像しとるんだ。お前のようなのをムツツリスケベと言っののかもな。ほら、見てみる」

やけに冷めた態度の美道に不満を覚えつつも、巡は物陰からこそと様子をうかがう。

何をしているのかと思いきや、陽夏は一人で準備体操らしきものを始めていた。手首足首をぐりぐり回したり、飛び跳ねたり。

人の目を意識していないせいか彼女の動作はダイナミックだ。そのためスカートの翻り方はかなりきわどい。

陽夏はそれ以上脱ぐ事はなかったが、落胆しかけた巡先生を満足させるには十分だった。

「ふん、白か……」

「……うん」

二人は陽夏のパンツの色について確認しあった。満場一致だ。

その後美道はどうでもよさそうにすぐに顔を引つ込めたが、巡はさらに目を凝らしていた。

すると彼女の背後、屋上の出入り口が再び開くのに気づく。扉から男子生徒がぞろぞろと吐き出された。

「ねえ、あれ！」

「来たか……」

美道は別段驚く様子もない。最初から彼らが来る事を知っていたようだ。

男子生徒の数は六人。それぞれ容貌や体型もバラバラで統一感がない。髪を少し染めた不良っぽいのもいれば、眼鏡をかけた太った男子もいる。

六人は少し距離を置いて陽夏を取り囲んだ。

「へへ……、このまえは世話になったな」「このときを待ってたぜえ……?」「せいぜいお手柔らかにな！ ひゃっひゃっ!」「……」

「はあ、はあ」

男子生徒たちは下卑た笑みを浮かべながら、陽夏に向かって口々に言葉を発する。全員どこか興奮しているようだった。

「ほんと懲りないなあお前らも」

異様な集団に囲まれながらも陽夏に気後れする様子は一切ない。助けを呼べそうにない屋上でこんな状況になったら、かなりの恐怖のはずだ。

「し、衆くん！ 大変だよ陽夏ちゃんが……」

「……いきなりちゃん付けか？ お前一人で勝手に親しくなってるな」

「どうしよう！？ 助けに行く？ でもあの人数じゃ……」

「まあいいから、黙って見てろ。下手に出て行ったりするとややこしくなるからな」

衆くんは女の子に対しては非情だ。やっぱり全然変わってないじゃないか。

このままじゃ陽夏ちゃんが……。あれ、でもどうなるんだろう。まさか集団で……。

……い、いけない、なにを想像してるんだ僕は！

「ほら、早くはじめよーぜ」

「クク………望むところだ！」

陽夏の一言で、正面にいた男子生徒が彼女に飛びかかる。

「あつ、ためえ抜け駆けは許さねえ！ 一番手は俺だ！」

続けて一人。

あつ！ ダメだ！

巡は思わず目をつむった。陽夏が魔法を使えるとはいえ、直前まで呪文を唱えるような素振りにはなかった。

ましてや相手は多勢で、同時攻撃もありうる。

その場の誰よりも一回り小さく小柄な彼女が、あの人数を撃退できるとは到底思えない。

ドッ、ドスッ、ガスッ！

鈍い音が響き渡る。どんな惨劇が繰り広げられているのか、目を閉じた巡にはわからない。

巡が血の気の引くような思いでいると、続けてすぐ悲鳴がこだました。

「うおっ」「ぐわあっ」「ひいつ」

だが聞こえてくるのは男子の野太い悲鳴ばかり。

不思議に思った巡はおそろおそろ目を開けた。

そこには殴る、殴る、蹴る、殴る、倒れたところをさらに容赦なく踏みつける陽夏の姿があった。

ど、どうなってるんだこれは……。

魔法？ いや思いつきり肉弾戦だ。ひたすら打撃しかない。それにあの子、嬉々として倒れた相手を踏んづけてる……。

「い、このおっ」

最後の一人が踊りかかるも、陽夏は素早い動きで身をかわすどこ

るかカウンターで拳をボディにまっすぐ突き刺した。
相手は吹き飛ばされ地面を転がり悶絶し、起き上がることができない。

あつという間に一人の女子生徒を残して全員が地に横たわる図ができあがった。

「あゝあ、全然ダメじゃん。前と変わってないし。やる気あんの？」

陽夏は倒れている男子生徒を一人一人げしげしと足蹴にして回る。

「おつ」「あうつ」「はふん」

陽夏が蹴るたびにそこで気持ち悪い声上がる。

陽夏はそうしてしばらく気色悪い楽器を奏でていたが、

「いまいち張り合いがないんだよなあ……」

そうつぶやくとつまらなさそうにさっさと屋上を後にした。

彼女がいなくなると美道は唖然とする巡を置いて倒れている男子生徒たちに近寄っていった。

巡もなにがなんやらわからず後を追う。

「今日もえがったわあゝ」「ああ。あの容赦のない打撃……たまるん」「もつと蹴られたかったなあ……」「陽夏たんかわいいよはあはあ」

上半身を起こした男子たちは、口々に感想？を述べていた。
事態を把握できない巡は美道に尋ねる。

「なにこれは……？　どういうこと？」

「まあ、つまりこいつらはM男の集まりなわけだ」
「M男……？」

巡はてっきりたちの悪い不良に因縁をつけられた陽夏が、屋上でランチにでもあうのかと思っていた。

だがそれはすぐに間違いだと気づいた。

男達はあれだけボコボコにされたにも関わらず誰もがすがすがしい表情をしていたからだ。

体を痛めているはずなのに今も楽しそうに談笑している。

不良ではないにしろたちの悪い集団であることに変わりなかった。

喧嘩上等？ 生意気暴力少女 6

「いやあ、誘ってくれてありがとう。噂には聞いていたがよかったよ。俺も入会させてもらう」

「おめでとう。君が会員十四号だ」

握手を交わす男たち。

いかがわしい会の会員が増えたようだ。

やがてそのうちの一人が巡と美道に気づいた。

「な、なんだ君達は。いつからここに？ 入会希望か？」

「そんなわけあるか。この変態どもが」

「僕ら、実はずっと見てたんですけど」

「な、なに……、見ていたのか？ おい、この事を陽夏ちゃんにバラすなよ……？ 俺たちはケンカをふっかけるフリをして相手をしてもらってるんだからな」

「知るか。ゴチャゴチャ抜かすと貴様……」

「「うおおおおっ！」」

その時背後で歓声があがった。巡と美道も驚いてそちらを振り向く。

すると一人の男子が財宝でも発見したようにあるものを両手で高く掲げていた。

それは女子の制服、すなわち陽夏がさっき脱いだブレザーだった。忘れていったのだろう。

「うおおおっ！ まさに神の落し物！」「うつひょおおおっ！ おい！ ちょっと貸してみろ！」「待て待て、ここは平等に人数分に

切り裂いてだな……」「バカ、それだと部位によって格差が出るだろ」

一斉に騒ぎ立てるM男たち。

「こいつは俺のもんだ！」と第一発見者が必死にありもしない所有権を主張しだす。当たり前だがそれは陽夏のものである。

「いや俺たち仲間だろ……？」と一人が説得に当たるも一步も譲る気配がない。

「構わねえ奪い取っちまえ！」と一人が強攻策をとろうとする。

今にも争奪戦が勃発し今度こそマジバトルが始まりそんな危険な雰囲気だ。さっきの陽夏とのやりあいの時とは比べ物にならない。このままだと死人が出そうな勢いだ。

悲しいかな彼らには制服を陽夏に届けてあげるという選択肢はないようだ。

危ない連中の雄たけびと異様な空気に巡は気圧されたが、美道はお構いなしにその中に切り込んでいく。

「おい、貴様らそれをこつちによこせ」

「なんだあ！？ 邪魔すんじゃない！！」

ものすごい殺気だった。彼らの全身から放たれるオーラは、ただのM男ではない、と感じさせる迫力があつた。

しかし美道も負けてはいない。

にやりと薄笑いを浮かべて言い放つ。

「この俺が誰だかわかった上でそんな口をきいてるんだろうな？」

「あんだ？ 知らねえーよてめえなんか！」

「……お、おい、こいつ、二年の美道じゃないか！？」

誰か一人が邪魔者の正体に気づいたようだ。

その声には驚きと畏怖の感情が入り混じっている。

「ほ、本当だ！ ヤツだ！」「な、なんだとっ！？ どうしてこんなところに！？」「ま、まさかこいつら屋上で……！」

彼らの顔色が一瞬にして恐怖に染まり、場に戦慄が走った。

美道衆の雷名は下級生、上級生問わず校内に轟いているのだ。

その名を聞いて震え上がらないのは男子にあらざるとまで言われている。

「ごちゃごちゃ言っていないで早くしろ。犯されたいか？」

「う、うわあああ！！」

陽夏の制服を投げ出し、我先にと一目散に逃げ出す男子生徒たち。結局屋上には巡と美道の二人だけが残された。

「し、衆くん……。なんという脅し文句を……！」

思わず後ずさる巡。当然彼も身の危険を感じずにはいられない。

「案ずるな、文字通り脅し文句だ。なんだまだ疑ってるのか巡。そんなに俺を信用できないか？」

「そ、そんなことないよ、うん。し、衆くんは生まれ変わったんだからね！」

巡は「うん」と即答しそうになったが、下手な事を言って再び覚醒したら困るのでとりあえずあわせておく。

本人がそう言っているうちはたぶん大丈夫。たぶん……。そう自分に言い聞かせながら。

「さて。ではこの制服を人質にするか」

美道は男子生徒が捨てていった陽夏の上着を拾い上げた。

「いや人質にはならないでしょ。人じゃないし」

「それは例えだ。そうは言うがお前、制服がなくなるとリアルに困るだろう。結構高いしきっちり採寸もしただろうしな」

「まあ確かにそれはそうだけど……」

なんか地味だなあ……。それに程度の低いいじめのようで気が引ける。

「そもそもさ、あの子魔法……使った？」

「よくわからんが使つとるだろう。あんな小柄な体で、男子生徒が吹き飛ぶような威力は普通に考えておかしい」

確かにM男たちのリアクションが多少大げさだとしても、そのやられっぷりは凄まじかった。

彼らに戦いの意思はなかったようだが、あれだけの数を悶絶させるぐらい攻撃するとなると大変だ。

逆に手や足を痛めたりすることだってあるだろう。だが陽夏にそんな様子は全くなかった。

「おそらく魔法による肉体の強化か、攻撃の瞬間に衝撃系の魔法を放つたとかそんなところだろう。たぶんな」

「うーん、でも悪用ってほどでもないような……。現に迷惑どころか喜ばれてるし」

「甘いぞ巡。俺は許さん」

「どうしてさ？」

「あいつは好き勝手暴れているだけなのに、あれだけ男子に人気が

ある。不公平だと思わないか？ 過去に俺がどれだけ苦労したか…

…」

「それ完全に衆くんの個人的な嫉妬だよね……」

それに今は男子なんてどうでもよくなっただんでしょ？

巡はそう言おうとしたがやめた。これ以上この話題を振るのはよくないと判断したからだ。

「いや実は……」なんて切り出されたら悔やんでも悔やみきれない。

「で、どうするの？」

「ボコボコにして顔面崩壊させる。さすがにブサイクに殴られて喜ぶほどの真性DMはいないだろう。これで奴の天下も終わりだ」

「なんか主旨が変わってきてるような……。そんなことしたら道程さんに怒られるんじゃないの？」

「む、そうか……。なら調教して俺のハーレム要員に……」

「いやそれも怒られるでしょ……」

巡が美道の荒唐無稽な発言にあきれていると、またもや屋上の扉が開け放たれた。

現れたのは話題の人物、陽夏だった。

勢いよく走り寄ってきた陽夏は、巡たちを見て不審そうな顔をする。

「あれ？ おまえらはさっきの仲間か……？ いや違うか。まあどうでもいいや」

陽夏は巡と美道の顔を交互に見比べるようにしながら独り言のように尋ね、勝手に自己完結した。
かなり大雑把な性格のようだ。

「ねー、あたしの上着知らない？ ここに忘れたみたいなんだけど……」

やはり忘れ物に気づいて戻ってきたようだ。
すぐに陽夏の視線が美道の手に行っている制服へ落ちる。

「あつ、それここにあったやつだろ？ あたしのなんだ、返してくれよ」

「うむ、いかにもここにあったものだ。返してやってもいいがその口の利き方はいただけないな」

「え？ あゝ、えっと。あたしの忘れ物、お拾いになってくれてありがとう。どーかお返しくだサイ」

「……バカにされてる気がするがまあいいだろう。ある条件を飲めば返してやらんこともない」

「じょうけん？」

「これからお兄ちゃんの下へ出頭してもらつ。まほ学校の校長のことだ、とぼけても無駄だぞ」

「えー、やだ。あのおっさんなんかキライ」

道程さん、陽夏ちゃんはおなたのことが生理的に受け付けないそうです。

衆くん考え直してともに交渉してくれてるみたいだけど、どうにも無理があるなこりゃ。

「そうか……。いいのか？ この制服がどうなっても」

美道はまるで大切な家族や恋人の命を握っているかのように言う。
……うーん、やっぱりなんか違う。

「えー？ そりやなくなったらやだけど……。どうなってもいいって言ったらどーするつもり？」

そつだよ。ただ捨てるって言ってもなんだかね……。

「そつだな……。制服にぶっかけて……」

「ちよつと待った！ なにを言おうとしてんの！」

「……え？ ぶっかけ？」

「もついいよ制服はかわいそうだから返してあげよう！」

巡は美道から制服をひつたるとそのまま陽夏に差し出した。

「あ、ありがと……」

陽夏は受け取りながら小さくつぶやく。まだ少し顔を赤らめていた。

か、かわいい……。

さきほど暴れていた人物とは思えないしおらしい態度にギャップ

を感じたのもあり、巡は内心ときめいていた。

「巡お前何を勝手に……。まあいい。もともと人質をとる必要などない。堂々と力づくで連れていくことにしよう」

「えっ、ホントに？」

ぱつとうれしそうな表情をする陽夏。

なんだろう、そんなに殴り合いがしたいのだろうか。

「準備をするから少し待ってろ」

そついうと美道は背中を向けて歩き出した。

少し離れたところで立ち止まり、なにかごそごそやっている。

気になった巡はその背中に近寄った。

「何してるの？」

巡が背後から覗き込むと、美道は包帯のような白い布を右手にぐるぐる巻きつけていた。

……ボクサーみたいで、本格的だ。女の子相手に本当に殴り合いする気なのかな……。

「遊んでいる時間はないからな、はじめから全裸で行かせてもらう」「全力で、ね」

「相手はおそらく何らかの魔法を使っている。ならこちらも遠慮なく使わせてもらうとしよう」

「あつ、そついえば衆くんも魔法使えるんだっけ」

「まあ俺は一時期お兄ちゃんに女子として扱われていたが、実際男だからな。中途半端なものしか使えない。だがそれでもヤツを仕留めるのには十分だ」

そういえば男の娘がどうたらって言ってた気がするけど……。
うん、まあいいや、深く掘り下げないでおこう。

「巡、しかと見よ！　これが魔法で鋼鉄と化すわが拳！　アイアン
ナックル、略してアナル！」
「うわっ、最悪な略し方！」

美道は布を巻いた右手に左手をかざすようにして呪文？を唱えた。

「……ふう、強化完了」

……が見た目には何の変化も見られなかったので、巡は強化され
たという拳に触れてみる。

すると布に巻かれた拳は人間の手とは思えないほどガチガチに固
まっていた。

「うわっ、これはすごい……」

「実際鋼鉄化しているのはこの魔法力が込められた布だ。本当は肉
体を直接鋼鉄化できればいいのだが」

「強化されたのはわかったけど、いくらなんでもそんなので殴った
らまずいよ、相手女の子だし」

「女だからこそ思う存分いけるのだろうが」

「……え？　女の子を大切にするんじゃないの？」

「……む？　ああ、いかんいかん。今はそういう設定だったな」
「設定！？　設定ってなに！？　変わったんじゃないの？」

「巡、お前はバカだな。こんなもので殴りつけたら相手の顔面を崩
壊させるどころかお亡くなりになってしまうぞ。これは単なる脅し
だ」

「それならいいけど……」

結局また脅し？ 脅迫が好きなのかなこの人……。ろくでもない。その時後ろからじれた陽夏が声をかけてきた。

「なあ、なにをごちゃごちゃやってんだよ。早くしろよ。……もしかしてやつぱりびびってんのか？ なっさけな」

陽夏は小ばかにした態度で美道を挑発する。

「よし。遠慮なく顔面をいかせてもらおうとするか」
「ちよ、ちよつとやめなよ！」

簡単に挑発に乗った美道は巡の静止も聞かず、向き直ってずいっと前に出る。

「おっ、やっとやる気になったか」
「安心しろ。一撃ですぐに終わらせてやる」

お互いが余裕の表情でにらみ合う。どちらも己の強さに自信があるようだ。

ただその強さ、どちらが本物なのか。実際に戦ってみるまではわからない。

喧嘩上等？ 生意気暴力少女 8（前書き）

すみません、久しぶりの更新です。

喧嘩上等？ 生意気暴力少女 8

そのまま両者至近距離でにらみ合う事数十秒。お互いが身動き一つせず、いつになっても手を出さない。

……あの二人の中ではお互いをけん制し合ってるんだろうか。きつと目に見えないところでせめぎあいが……。

そんな巡の考えとは裏腹に、しびれを切らしたような陽夏の声。

「なあ、もうはじめていいのか？」

「あ？ ああ、いつでも構わん。まあ万が一貴様が俺に一撃でも入れたらたらのふぐおおおっ！？」

「ずうっ！」

言い終わらないうちに陽夏のストレートが美道の顔面にめり込んだ。

ひととき鈍い音がしたかと思うと美道の体が宙に投げ出される。三メートルほど空を飛んだ美道は、受身も取れずに地面に全身をしたたかに打ち付けごろりと転がった。

そして「むううん……」と一唸りした後ピクリとも動かなくなつた。美道の宣言どおり一撃で終わったようだ。

……変な悲鳴。

「……し、衆くん弱つ。さんざん威張ってたわりに……。さっきのにらみ合いはなんだったの？ あと魔法も意味なかったし」

陽夏は勝負は決まったというのに、追いつがってうつ伏せに倒れている美道の尻をうれしそうに踏みつけている。

完全に気絶しているのに、全く容赦がなかった。

陽夏は敗者にムチを打ちまくった後、満足そうな顔で巡に向き直った。

「さーで、次はお前の番だぞ」

「え？ 僕？」

なぜか僕まで戦う……、いやボコられることになってる……。

まずい、このままだと衆くんの二の舞だ。喧嘩なんてろくにしたこともない僕にかなう相手じゃない。

それに強い弱い以前に、なんかこの子普通じゃない。なんていうか……根っからの暴力好き？ 戦闘民族？

いや待てよ。いつの間にかバトル前提になってるけど、こっちとしては別に戦いを望んでいるわけじゃない。

ちよつとおとなしくするように注意をすればいいだけだ。

「待つて。僕に戦いの意志はないよ。ここは平和的に話し合おう」

「うん、わかった」

陽夏は意外にもすんなりおとなしくなって、ゆつくり歩み寄ってきた。

そつだ、何も戦う事なんてない。人間には言葉がある。それによって相互理解を深めてきんだ。

暴力で解決するなんて野蛮な生き物がすることだ。こんな子だつてきつと真摯に話し合えばわかってくれるはず。

まずは理由。それを聞かないことには話にならない。

「ねえ、どうして君はそんなに暴力をふるうんだい？」

「ふんっ！」

どすっ！

巡のわき腹に右フックが返ってきた。

「ぐあつ！ な、なにするんだよ！ いま話し合いするって言ったばっかじゃ……」

「え？ これは立派な話し合い方だぞ？ 肉体言語を使つての」

「うぐ……、そんな言語知らないよ！ だ、だいたいなんて言つたのかさっぱりだよ！」

「なに？ しょうがないやつだな……、訳してやるーか。今のはな、脇がから空きだぞ！ って言っただよ」

「それじゃ僕の質問に答えてないよ！ 会話になつてない！」

ぐう……。ダメだこの子。まさにお話にならない。ふざけてるのがマジなのか……。

いや、マジだ。目がマジだ。

「なんなの君は。そうまでして僕をボコボコにしたいの？ 何の恨みがあつて？ って言ってるそばからなんで拳を握り締めてるの！？」

「拳で語りあつた方が早いよきつと」

「語り合うというか一方的な罵倒になると思うよ」

「って言つても口ではうまく説明できないんだよ……。うーん、なんていうか……ただ肉を殴りたい……。それだけなんだ」

「うん、なんとなく伝わった。君がおかしな子なんだってことだけはね！」

「じゃ一発だけ。おねがい、ね？ すぐ終わるから」

「一発あつたらもう十分だよね！？ 僕きつと再起不能になるよ！？ そんなに殴りたければサンドバックでも殴つてればいいじゃん！」

「無抵抗のものを殴つても楽しくないし。抵抗があるときほど殴つた時の喜びも大きいもんだ」

「僕無抵抗なんだけど！」

「じゃあせめて、選ばせてあげよー、右足で殴られるか左足で殴られるか」

「足で殴るんだ！ 斬新だね！」

陽夏は今にも巡に襲いかかりそうだった。

進退窮まった巡が何とかこの場を打開できないかと考えていると、

「待ちなさい！」

何者かの声が屋上に響き渡った。

巡が声のしたほう、屋上の入り口のほうを振り向くとそこには一人の女子生徒が。

彼女はのしと大またに巡のそばまでやって来る。

「あつ！ メルちゃん、どうしてここに！」

「それがね、偶然通りかかったの」

「真顔でサラリとウソつくね。ここ屋上だけど？ すごい不自然な登場だし、どうせ尾行してたんでしょ？」

「……やっぱりめぐるちゃんの前ではうそはつけないね。本当は瀕死になったためぐるちゃんを助けたあと、わたしが代わりに襲おうと思っただけで今かと待ち構えてただけだよ。本当のことなんて聞きたくない」

「ちよつとガマンできなくなって早まっちゃったみたいだからもうちよつと待ってるね」

「いいよもう！ また隠れようとししないで！ 絶対に僕の目の届くところにいて！」

陽夏は不思議そうにメルを見て言う。

「だれ？ 仲間？」

「違います」 即答する巡。

「違います、恋人です」 すかさずメルの返事。

「違うよ！」

「あつ、そっか愛人か」

「ただのクラスメイトだよ！」

「えっ、それはつまり一からやり直そうって事？」

「いまマイナス百だから一からやり直すっていう表現は当てはまらないよ」

「え？ ……そ、そんな……。百点満点だなんて……。うれしい！」

「いやいやいや、マイナスって言ったんだけど、メルちゃんってあれかなあ、都合の悪いところは聞こえないのかな？」

「うん？ ちゃんと聞いてるよ？ マイナス百ってことはつまり裏を返せば満点ってことだよな！」

「勝手に裏返さないでよ！ 大胆に裏返すねほんと！」

突如現れたメルによって場の空気はあつという間に持っていってしまった。

喧嘩上等？ 生意気暴力少女 9

「メルちゃん、一体いつから見てたの？」

巡はいきなり現れたメルに質問する。

隠れて様子をうかがっていたと言うが、どこまで本当なのやら。道程に頼まれた仕事内容は伏せておきたいが、メルの返答によってはもうばれてしまっているかもしれない。

「めぐるちゃんがその子の写真を見ながら下半身をゴソゴソやっているとかな」

「やってないよ！ 最初からいた僕でも知らない光景だよそれは！」

「わたしには未来が見えます。ひそかにズボンのポケットに写真を忍ばせためぐるちゃんが、おうちにかえってから一人でゆつくりと

……」

「あーもう！ どこから見てたらそんな細かいところまで見えるの！？ そんなに言うならこれはメルちゃんに渡すよ！」

巡はポケットから美道に受け取った数枚の写真を取り出し、ビシツとメルにつきつきた。とはいえどこか名残惜しそうな巡先生だった。

「やったあ、今夜のおかずゲット！」

「なんでそうなるの、それは陽夏ちゃんの写真だよ！」

「え？ だってわたし両方いけるし」

「うわっ、サイアクだ」

メルは巡から渡された写真を懐にしまいこむと、陽夏のほうに顔を向けた。

「さあて、今回はあの子を更正させればいいんだよね」

「あ、あれ、やっぱり知ってるんだ……」

「うん。めぐるちゃんがわたしに隠し事をしていたことはのちのちベッドの上で問い詰めるとして」

「いつも一緒に寝てるみたいと言わないでくれない!？」

巡はメルちゃんが絡んでくるとすごく嫌な予感がするんだよね、
と思ったが現状巡一人では更正なんてとても無理そうだ。

美道は全く役に立たなかったし、ねころがったまま当分動き出し
そうにない。

メルは改めて陽夏に向かってあいさつをする。

「はじめまして、わたし、メルちゃんです。陽夏ちゃんっていうんだよね。ヒナちゃんって呼んでいい？」

「別にいいけど……、もしかしてメルってあの……?」

「そうだよ、まほ学の。だからヒナちゃんの先輩でもあるよ」

「へえ、あんたがああメル先輩か……。そんな話に聞くほどでもなさそうじゃん。けっこうかわいいし」

「そんなあ、ヒナちゃんのほうこそ超かわいいし今にも押し倒しちゃいそうだよ」

「……え」

硬直する陽夏をよそに、メルはうれしそうな顔でひそひそと巡に耳打ちしてくる。

「ちょっと今の聞いた? めぐるちゃん。この調子なら今日お持ち帰りできちゃうかも!」

「いや、向こう引いてるから。今絶対引かれたよ」

わりと好感触だった第一印象を一瞬で覆してしまう、それは変態少女の定めだった。

メルは再び陽夏に向き直る。

「うーんと、どうしようかな。ヒナちゃん、ぶつぼうが好きなんだよね？ それじゃまずはおしりを思いっきりひっぱたいてもらおうかな？」

「え？ えーっと……」

「あつ、もしかして何か道具を使った方がいいかな？」

巡は後ろからメルの腕をつかんでぐいっと体を180度ターンさせる。

「ちょっとメルちゃん！ あんた何しに来たんだ！ まじめにやりなよ！」

「えー？ だつてえ……。じゃどうすればいいの？」

「……うーん、ああいう子は自分で痛い目を見ないときつとダメだと思っんだ。他人の痛みがわからないからためらいなく暴力を振るうんだと思う」

「ふーん、そういうものかなあ。じゃあメルちゃんが女王様をやればいいんだね？」

「よくないけどね、メルちゃんがなんとなく理解してくれただけでもううれしいよ」

やっぱりダメかもしれない……。

さすがの陽夏もどこかおかしな雰囲気を感じたのか、ちょっと困ったような顔で提案をする。

「あ、あのさ、やっぱり一方的に殴るのもあんま面白くないから、そっちも遠慮なくかかってきなよ」

「チャンスだよメルちゃん。向こうもああ言ってるし」
「うーん、じゃあどうしよっかなー」

メルは立てた人差し指を口元に当てて、顔を傾ける。
……悩むほど選択肢があるんだろうか。なにかこのシンキングタイムは非常に危険な予感がするぞ……。

「決めた！ アークメテオフォール（通称アクメ）にしよっと！」
「なんかすごそうな名前だけど……。どんな魔法なの？」
「うーんとね、空から巨大な質量を持った隕石が落下して対象を跡形もなく粉碎するの」

「ちよつと、まんまじゃんそれ！ なにそれ全然スケール違うよ！
これはちよつとしたケンカみたいなものでしょ！？」

「落下の衝撃でこのあたりはしばらく人が住めなくなるかなあ。あ、安心して。わたしとめぐるちゃんだけは生き残るようにするから」
「それだったらいつそのこと僕も一緒に殺して！」

「ちよつと時間かかるからまっててね」

「ストップ！ ストップ！ ちよつとでそんな覚悟できないよ！
だいたいメルちゃんの魔法は極端すぎるんだよ。なんかないの？
こうちよつと驚かせるようなのは」

「ええー？ そんなこと言われてもなあ……」

またも思案顔になるメル。

そんな強力な魔法が本当に使えてしまうのか気になるところだったが、試しにやってみてともいえないのが怖いところだ。

やがてメルは何か思いついたようで、ハッと目をパッチリ見開いた。

「あつ！ いますつごくぴったりの魔法思い出しちゃった！」
「えっ、なにになに？ どんなの？ 使うのはきちんと一から十まで

僕に説明してからにしてね！」

「いづくよー！ アンダーステイ・ル！」

「だから待てって！」

巡が慌てて止めに入るも時すでに遅し。

メルがパツと取り出したステッキの先が、ピカッと光る。ステッキの指し示す先はもちろん陽夏。

巡は一瞬大災害を覚悟したが、周囲には何の変化もおきない。当の陽夏もただ目をぱちくりさせているだけ。

「……ち、ちよつと、数分後大地震を起こすとかそういうのじゃないでしょうね!？」

巡はビクビクしながらメルを問い詰める。

「じゃっじゃーん！ さてこれはなんでしょうかつ？」

ステッキをしまったメルの手には、いつの間にか女物のパンティが握られていた。

「えっ？ パンツ？」

「そうです、これがヒナちゃんの……、あ、間違えたこれはわたしのだった」

「ちよつとなんで脱いでんのさ！」

「正解はこっち！」

もう一枚の白いパンティを高々と掲げるメル。すると陽夏の顔色が変わった。

「あ、え？ あれ？ そ、そんな！ うそ!？」

陽夏は慌てて両方の手でスカートを押さえる。
その顔色がみるみるうちに真っ赤に染まっていく。

「正解はヒナちゃん脱ぎたてパンツでしたー！ ぱちぱち」
「ええっ！！」

巡は驚きの声を上げながらも、その視線はパンティと様子のおかしい陽夏の間を何度も行ったり来たりしていた。

「……なんて恐ろしい魔法なんだ……。でも、なんかすごくわくわくするぞ……！」

メルは両手でパンティの両端をつかみ、傾きかけの太陽にすかすようにして顔の前に持ち上げた。

光を反射しキラキラと神々しい輝きを放っている。

「それでは不肖、わたくしメルが神妙に検分させていただきます」
「わ、わぁー！ や、やめろっ！」

慌てて奪い返そうとする陽夏。だがスカートがめくれてしまうのが気になり、大胆な動きが取れない。

「めぐるちゃんパース！」

巡にむかって下から上に手を振ってパンティを放る。

布きれが宙を舞い、上向きに両手を広げた巡の手元にふわりとパンティが乗った。

これが陽夏ちゃんの……。まだかすかにぬくもりが……。

「か、返せっ」

陽夏が血相を変えて巡につかみかかろうとする。

スカートをおさえつつ小走りやってきた陽夏の手が、パンティをひったくるその寸前。

ぽたり。

白いパンティが、赤く染まった。
興奮した巡が垂らした鼻血によって。

「あーっ！ 血！ 鼻血たれてるよ！」
「……え？ あ」

陽夏にそう指摘されてやっと気づく巡。その間もぼたぼた鼻血は流れ続け、さらにパンティは赤く染め上げられていく。

陽夏が手元にさっと取り戻すも時すでに遅し。白かったパンティに赤いまだら模様ができてしまっていた。

「うつ……、もうはけないじゃんか……」

軽く涙目になる陽夏。そんな彼女を見て二人は申し訳なさそうに謝罪する。

「ヒナちゃん、ごめんね。まさかめぐるちゃんがそんなマンガみたいな事になるなんて思わなかったから……」

「……ご、ごめん」

「このままじゃ家まで帰れないよ……」

「大丈夫、メルちゃんの貸してあげるから」

「えっ、予備のパンツなんて持つてるのか？」

「ん？ さっきまでわたしがはいてたやつだけど？」

「やだよそんなの！ ていうかなんで脱いでるんだ！？」

「返す時も洗わないでいいからね」

「な、なんで！？ あ、洗うに決まってるでしょーが！ いい、いい、いい！」

メルはポケットから取り出した自分のパンツを陽夏に握らせようとするが、頑なに拒否された。

すでに戦意を喪失していた陽夏に向かって、メルはさらに追い討ちをかける。

「でもヒナちゃん！ お互いノーパンということは、これで五分だね。ここからが本番だよ！」

「もーいい！ あたしの負けでいい！ もう帰る！」

「決着はキックボクシングで決めるよ！ じゃ行くよ、えい！」

「な、なに考えてんだよ！ うわっ、み、見えるって！」

「ほらほら、ヒナちゃんもどんどん攻めてきて！」

メルはためらいなく足を上げて、へろへろの攻撃を繰り返す。

目の前で繰り広げられようとしているノーパンバトルに、巡の興奮度は最高潮に達していた。

うつ……鼻血が止まらない。頭がクラクラしてきた。こ、このままだと……、ぶっ倒れちゃいそうだ。

でもこの戦い、僕がきちんと見届けないと！ 一秒たりとも見逃せない！

あっ、でもやっぱり無理。もう手がブラッディハンドだよ、どうしよう。

……あっ、そうだ！

その時巡は、左手に巻きつけていた腕時計を外した。

するとまばゆい光とともに、巡の体が女子のものへと一瞬で変化した。

途端に鼻からとめどなく溢れ出ていた出血がピタリとやんだ。

「君たち、はしたない真似はやめたまえ。スカートにノーパンでキックボクシングだなんて、やっすい企画モノのAV以下だよ」

弱冠高くなった声で巡女史は二人をたしなめるように言う。浮かべているのは余裕の表情。

今の巡は性欲が消えた、いわゆる賢者モードである。ただし二次元のおじいさんには弱い。

「ど、どうなってんだ？ 急に声が変わって顔も女っぽく……」

巡の変化を見て驚きを隠せない陽夏。陽夏のスカートをつまみあげようと強硬手段に出ようとしたメルがすぐに答える。

「めぐるちゃんは女の子のクセに男の子の格好して性的興奮を得ているんだよ」

「違うよ！ なんでそういうウソつくかなあ！」

「昨日はどっちでオニーしたの？」

「うるさいな！ だいたいこっちだとともそんな気にならないんだよ！」

「っていうことは女の子の時に自分のハダカの写真を撮っておいて元に戻ってから……」

「考え付かなかったなあ！ こういうことになると思うく知恵が回るね！」

「わたしにも後で写真分けてね」

「撮らないよ！ なんであげなきゃなんないの！」

「じゃあわたしのと交換ならいいでしょ？」

「えっ、えっと……い、いやよくないよ！」

そんな二人のやりとりを見て、ゆっくり後ずさりをする陽夏。あれほど勝気だった彼女が、明らかにおびえている。

「へ、変態だ……。こいつら……」

「え？ なにヒナちゃん。聞こえなかった、もう一回」

「変態だあー！ もうやだー！」

陽夏は叫びながら屋上の扉へ向かって逃げ出した。

途中転がっていた美道にけつまずきそうになったが、「邪魔なんだよ！」と言つて鬱憤を晴らすように動かない彼を二、三発蹴りつけていった。

ギィ、バタンと屋上の扉が閉まると、後には変態だけが残された。

「……あーあ。行っちゃった。メルちゃんのせいで失敗だ」

「めぐるちゃんが早く脱がないからダメだったんだよ」

「そんな別れ道どこにもなかったよね……。……ああ、どうしようこれ」

巡は手に持った血のついたパンティを見て困惑する。

「それ、なんかすっごいいやらしいね。ある意味。……貸して、わたしが明日ヒナちゃんに返すから」

「僕にその言葉を信じると？ これは僕が責任を持ってキレイにしてから返すよ」

「そう言つてネコババする気でしょ！？ めぐるちゃんのヘンタイ！」

「しないよ！ 絶対に君にだけは言われたくない！ 絶対に！」

「ヘンタイでもなんでもいいから渡して！」

「なに開き直つてんの！ いや開き直つたというより本性を現したか！」

ぎゃーぎゃーとパンティをめぐつた二人の争いは、すっかり日が暮れるまで続いた。

そして美道は二人が帰った後もずっと転がったままだった。

訪問！ メルちゃんのお宅

翌朝、通学路。

メルに遭遇したトラウマで、すっかり遅刻するようなこともなくなった巡はゆったりとした足取りで学校へと続く道を歩いていた。

巡は朝からずっと悩んでいる。

彼の鞆には、昨日激しい口論の末勝ち取った陽夏のパンティが忍ばせてある。

自分が責任をもつて返すとメルに言い張ったものの、実際これをどう返したものと頭の中はそのことでいっぱい。

昨日の晩、道程から電話があり陽夏から自分への変態男装疑惑は晴れたようだが、それでも彼女とは顔をあわせずらかった。

巡は昨晚の道程との電話の内容を思い出す。

「いやあ、めぐる君。お手柄だよ。さつきねえ、陽夏ちゃんがやってきてねえ、『変態に狙われたくないからどうかして』ってお兄ちゃんにすがってきてさ。いやあ、あの陽夏ちゃんがねえ、あんな弱々しい一面を見せるなんてちよつと感動しちゃったよ。一体何をやったんだい君」

「僕は別にたいしたことしてないですよ。あの、もしかしてメルちゃんにこの仕事の事教えたの道程さんですか？　なんか知ってたみたいなんですけど」

「え、……あ、それね。いやあ、あのあとなに話してたの？　ってしつこくてさ、ついつい……。ま、まあ毒をもって毒を制すみたいな感じで彼女にも手伝ってもらったんだよ」

「毒ってというか猛毒ですよ！　もうめちゃくちゃなんですから！」

「で、でも結果オーライでしょ？　大丈夫大丈夫。陽夏ちゃんには

ちゃんと説明して、全部わかってもらったから。もちろんめぐる君のこともね」

「そ、そうですか……。で、結局陽夏ちゃんはどうなるんですか？」

「あの子ね、狂戦士の魔法がかかってるんだよね……。身体能力、とくに攻撃力が上がって、それで暴力性が増すっていう。あの子本来すごくかわい子で、どうしてもそれを克服したいって言うからお兄ちゃんがかけたんだけど、解けなくなっちゃった。えへへ」

「えへへじゃないっすよ！　なんてことしてんですか！」

「いや、本人は知ってるし喜んでるからまあいいかなー、と」

「そんなんでいいんですかホントに……。で、今回の件はこれで終わりでもいいんですか？　やっぱりダメですか？」

「いやいや、合格だよ。陽夏ちゃんもちよっとはおとなしくなるだろうし、いいものを見せてもらったし。めぐる君には引き続きお願いますよ。次のターゲットとか詳しい話は衆ちゃんから聞いてね。じゃ、おやすみ」

……そういえば衆くんってあの後どうなったんだろ。まあ別にいつか。

巡は美道のことが一瞬頭をよぎったが、すぐにどうでもよくなった。そんなことよりいまは大事なミッションが控えているのだ。

「めぐるせんぱーい！」

男子が持ち歩くには危険なこのアイテム、どうしてくれようと悩む彼を呼びとめる女子の声が聞こえた。

巡には先輩、なんて呼ばれるような間柄の後輩はいない。しかも下の名前で。

……この声は、もしかして。

慌てて後ろを振り返ると、そこにはにこやかに笑顔を振りまく美少女の顔が。思ったとおり案の定陽夏だった。

ひょこつと一箇所だけ結わえた髪がチャームポイントの彼女は、目線の少し下から上目遣いにこちらを見つめている。

その愛らしく熱い視線を受けて思わずでれつと頬が緩みそうになる。

だがその頬は一瞬にして苦悶に引きつった。

どすつ！　ごすつ！

巡の腹を太鼓よろしく陽夏の左右の拳が交互に一発ずつ叩いたのだ。

「うおごつ！　……な、なにするんだよいきなり！」

「え？　あいさつに決まってるじゃん」

「ど、どこが！　ボディーブローを入れただけでしょ！」

「ちゃんと敬語であいさつしたんだけどなあ」

「いや全然伝わってないから、敬う気持ちとか！」

「おはよう、ございます。で二発だったんだけど？」

「それじゃ先輩の方が一回多く殴られることになるみたいね！」

「……うーん？　って言っても先輩にタメ口はよくないじゃんか」

「タメ口！　今すごいタメ口だよ！」

巡はぜえぜえと息も絶え絶えに陽夏をいさめた。

しかし彼女は悪びれる様子もなくただにこにこしている。自分がおかしな事をしているなんて微塵も思っていないようなそんな顔で。

「昨日道程のおっさんに聞いたんだけどさ、巡せんぱいって、メルせんぱいに女の子にされちゃったんだって？　すっげーなあ、ぷぷ

っ

「いや笑い事じゃないよホントに……」

……他人事みたいに笑ってるけど、自分だって道程さんに魔法（呪い？）をかけられたクチでしょうが。

だけど本人はそれが苦とも思っ てないんだよな。むしろ楽しそうにしてるし。

「あっ！ めぐるちゃん！ それにヒナちゃんも！ おっはよー！」

巡はその声にとっさに身構え、陽夏はさつと巡の陰に隠れた。

二人の視線の先はやはり笑顔全開のメル。手を振りながら小走りに近づいてくる。今日もやたらとスカートが短い。

「お、おはよう。……メルちゃん今さ、学校の方から来たよね？ な、なんで通学路逆走してるの？」

「うん、ちよつとね」

「……ちよつとなに？ ちよつとねって言われても全然納得できないんだけど……」

今日も今日とて彼女は朝一から不審すぎた。

しかしこれ以上追求してはならない、と巡の中で警報が作動する。無理に尋ねたところで聞かなければよかった……、と後悔する。ことは目に見えてるのだ。

ごまかすように背後の陽夏へ声をかける。

「ほら、メルちゃんだよ、あいさつしないの？ 敬語で」

巡の背中であちこまる陽夏は、完全におびえていた。昨日の男子生徒たち（M）をボコボコにした時の威勢はどこへやら。

「オ、オハヨウ、ゴザイマス」

「陽夏ちゃん、それはないんじゃないかな、うっ！」

背中を叩く肉体言語。うるさい、とでも言わんばかりなのは巡にも伝わった。

「おはよ！ 昨日のヒナちゃんの写真、すごくよかったよ。びっくり。ちゃんと写真たてに入れて部屋に飾ってあるから」

「いやメルちゃん、あれはそういう類のものじゃ……」

被写体があさつての方向向いててカメラに気づいてないし……。

「し、写真でなんの……？」

「あれ？ ヒナちゃん知らない？ じゃ今日わたしのお家にいこっか。見せてあげる。もちろんめぐるちゃんも一緒にね」

「えっ、いや、あの」

「僕はいいよ。女の子同士二人で……うぐっ！」

ふたたび背中ドン。今度のは「かわいい後輩を一人変態の住処に遣わすつもりか」、という解釈であながち間違いはないだろう。

「ところでめぐるちゃん、きのうのアレは？」

「……なにアレって」

「だーからあ、ヒナちゃんのパン……」

「あーはいはいそれね！ 心配しないでいいよそのことは！」

「えっ？ 今日わたし番でしょ？ 早く出して」

「番とかそういうのないから！」

「もう！ しょうがないなあ、十万までなら出すから」

「ずいぶん出せるねえ！ 僕一瞬迷っちゃうくらいだよ！」

「そんなに嫌がるってことは……、まさか今履いてるの!？」

「履くわけないでしょーが!　ちゃんと鞆の中に……」

「そこかっ!」

「うわっ、やめろこの変態!」

昨日の続きとばかりに再び繰り広げられるパンツ争奪戦。メルは鞆を狙いつつも巡の体にボディタッチするのを忘れない。

対する巡はどうしても引き気味になってしまい、そしてついには背を向けて走りだした。

すでに陽夏は二人が言い争っている間にとくに脱出している。

遠くから学校のチャイムの音が聞こえる。遅刻まであと五分。

巡は全力疾走しながら今日も波乱の一日が始まりそうな予感を感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7199u/>

外法少女と魔法少年

2011年12月17日18時52分発行